

日文研

2017年3月

no.58

International Research Center for Japanese Studies

国際日本文化研究センター



江戸城図（モンターヌス『東インド会社遣日使節紀行』1669 年版所収）

『東インド会社遣日使節紀行』は17世紀中盤における東インド会社職員による複数の江戸参府日記や報告書を編纂したものである。同書に挿入されている図版の一つである江戸城図からは、通常目にする日本側の江戸城図とは趣の異なる印象を受ける。来日経験のない絵師が作成したことを考慮すれば、写実的に描けていないのは当然ともいえる。とはいえ、この江戸城図をより細かく鑑賞すると、城壁の石垣や漆喰、瓦などの描写にある程度の正確さがあることに気付く。オランダの絵師は、江戸参府に同行した職員が描いたスケッチを参考にしたのではないかと推測される。

日文研所蔵外書（解説：フレデリック・クレインズ准教授）

日 文 研

— エッセイ —

鄭 在貞 京都えらい 2

山崎佳代子 わが母国、旅の断章 9

マッツ・カールソン 村上春樹はノーベル賞をとれるのか？ 15

バーバラ・ハートリー 日本の美術館の魅力 20

鄭 相哲 濟州市方言との出会い 26

佐野真由子 公用語について 30

郭 南燕 南十字星の下の海外シンポジウム 37

光平有希 日文研データベースの将来を考える―「平成二八年度『デジタル技術を用いた

支援ツールの活用による研究成果の可視化』に関する研究会」に参加して― 44

— センター通信 —

西川真樹子 クリーニング・オールナイト―寄贈レコードのその後のお話― 50

共同研究 54

基礎領域研究 70

彙報 72

所員活動一覧 78

エッセイ

京都えらい

鄭 在 貞

法古創新の歴史博物館

今、京都が人気である。二〇一五年、京都市の観光客の数は五六八四万人で、三年連続で最多を更新した。政治の混乱に重ねて経済さえ低迷気味のソウルの一市民として羨ましい限りである。

京都は一一〇〇年もの間、日本の首都だったうえに、外国の侵攻もなく、古色蒼然とした街の景観が比較的よく保全されている。だからといって、京都は歴史の重さに踏み付けられた老いた都市ではない。「ポケモンゴロ」を創案した任天堂や新素材を開発した京セラなどの先端企業の数多い若い都市である。人口は東京の一〇分の一にすぎないが、東京よりも多くのノーベル賞受賞者を輩出している。京都は法古創新、すなわち古きものを消化し尽くして、新しいものを生み出す革新都市なのである。

私は二〇〇五年に一年、二〇一六年に三ヶ月の間、京都の桂坂にある国際日本文化研究センターに外国人研究員として滞在した。東アジアにおける鉄道の歴史と文化を相互参照の観点か

ら研究するという名目であった。その成果の一端は、日本で『帝国日本の植民地支配と韓国鉄道』などで出版された。修道院のような日文研の静かな環境は、誰もが研究に没頭してしまう魔力を持っている。

私は週末や休日に度々山の修道院から抜け出し、京都を隅から隅まで探索した。そのときに気付いたのは、京都は歴史を活力の基盤とし、伝統を重んじながらも、常に新しい文化を拓く創造の気風を持っているということだった。つまり、京都は危機に際し、古い文明から新しい文明を作り出す文明転換にすぐれた。

韓日関係史の生きた展示場

もう一つ、驚いたことがある。京都のあちこち散らばっている宮闕、寺院、神社、景勝地、大学などは、韓国とのゆかりが深いという事実であった。韓日関係の歴史を研究し、教育してきた私には京都は生きた博物館であり、展示場であった。私は京都を探索しながら見て感じたことを書き留め、韓国で『京都から見た韓日通史』（改訂増補版、『ソウルと京都の一万年』）を出版した。京都の来歴、市街、都城、宮闕、寺院、神社、景勝地、大学などを素材にして記述した韓日関係の歴史物語である。

狭い海を挟んでいる韓国と日本は、古代から現代まで、お互いに密接な関係を結びながら、それぞれ個性豊かな文明を発展させてきた。韓国は日本の古代文明に大きな刺激を与え、日本は韓国の近代文明に多大な影響を及ぼした。文明の交流は平和的に行われたこともあったが、強圧的に行われたこともあった。紆余曲折を経て、韓国と日本は、人種・文化などの面で最も近い隣国となった。米国の著名な文明史家ジャレッド・ダイヤモンドは、『銃、病菌、鉄』と

いう名著で、このような韓国と日本を「幼年期を一緒に過ごした双子兄弟」に例えた。歴史認識をめぐる葛藤と対立を繰り返している韓国と日本に、世界文明の次元で韓国と日本の親近性を再評価するよう促したものである。私は彼の忠告に百パーセント同意することはできないが、京都の歴史の中には、彼の見解に賛同したくなるような証拠があまりにも多い。私はそのような現場を自ら訪ね歩いて前の本を執筆したのである。

京都の歴史と文明交流

京都は、桓武天皇が平安京に遷都した七九四年以来、日本の政治と文化の中心地であった。幕藩体制が成立して権力の中心が鎌倉や江戸に移った時代もあったが、明治維新後、天皇が東京に移居した一八六九年まで京都は日本の首都であった。そのおかげで、京都には今でも一六〇〇軒の寺院と四〇〇軒の神社が軒を連ねている。だが、数回の内乱と火災などで都市の大半が燃え、破壊されたので、平安時代はおろか鎌倉時代や室町時代の建物さえあまり見当たらない。京都は平安時代の寝殿敷地に幕府時代には武家邸宅が、そして明治維新後は商街建物が建てられた。このように歴史に翻弄されつつも、骨と肌を変えながら京都は「日本人の心の故郷」の座に昇り詰めた。

今日の京都は、豊臣秀吉が再編成した都市構造に基づいているが、京都というと平安京を思い起こすのは碁盤のような町並みが平安京に由来するからである。直角に交差する街路こそ京都に残った平安京の痕跡だといえる。平安京は日本の首都であった藤原京、平城京、長岡京はもちろん、唐の長安と北魏の洛陽、新羅の慶州、渤海の東京なども参考した。したがって平安京は日本の古代宮都の完成形といえることができる。

平安京には、韓国から渡来した人物の面影が濃く滲んでいる。彼らは京都の山野を開き、首都の基盤を創った。そのため、廣隆寺、松尾大社などの古くて大きい寺院や神社などには、渡来人との因縁が色濃く残っている。圓仁などの高僧は新羅將軍張宝高の船団を利用して唐に留学した。京都一帯は古代韓国との文明交流を知らせる遺跡が非常に多い。

平安京は一一世紀を前後して京都という名前を持つようになった。天皇の朝廷が弱体化されて武士が政権を握ると、武士政権の拠点である鴨川の東部が新しい市街地として浮上した。また東山、北山、西山一帯に寺院が多く建立され、京都は仏教振興の中心地となった。東寺と西寺しかなかった京都に民衆が施主となり、参拝する寺院が出現したのだ。歲月とともに寺院は爆発的に増加し、京都は宗教と日常が密着した新しい景観を持つようになった。

京都の葛野山に高山寺がある。多数の文化財を保有している古刹である。住職明恵上人は新羅の高僧元曉と義湘を欽慕し、彼らの修行の様子を絵に描いた。この絵巻に描いている義湘と善妙娘子の切ない愛の物語は韓国の名利浮石寺にもひそめられている。中世にも韓国と日本の知性は、時間と空間を越えて交感し合っていたのだ。

中世の京都は、古代の国営産業に従事していた多数の商工人たちが、平安京の作動システムが崩壊したあと自ら独立して、共同組合を結成し、営業権益を守ったため、日本最大の商工業都市に成長した。経済の発達と文化の隆盛を促進し、民衆の行事である祇園祭りが誕生した。

しかし、京都は一五世紀半ばに応仁・文明の乱が起こり、致命的な打撃を受けた。回復までに二五年の歳月がかかったが、過去の栄華を取り戻すことはできなかった。京都は二つに割れ、上京と下京の間に約二キロの田園地帯が生まれた。まるで双子の都市のような都市景観は、約一世紀も続いた。京都の住民たちは活力を取り戻すために祇園祭りを盛大に挙げるな

どし、力を注いだ。

豊臣秀吉は上京と下京の空地をなくし統合する大事業を行い、周辺を土壁で囲んだ。彼は街を東西南北に区画し、市内と郊外を洛中と洛外に区分した。また、中心部に御所を再建し、その隣に自分の居場所として派手な聚楽第を新築した。彼は権力を振るって、散らばっていた寺院を寺町に集め、有事の際には防御線としての役割を与えた。

京都には、豊臣秀吉の朝鮮侵略に関連した遺跡があちこちに残っている。豊國神社の前には朝鮮人の耳と鼻を剃って埋めた耳塚があり、椿寺には朝鮮から持ち帰った冬柏が茂盛である。朝鮮から連行された被虜人である姜沆は伏見で僧侶藤原惺窩に朱子学を伝授し、近世儒学の祖宗になった。

豊臣政権を倒した徳川政権は政治の中心を江戸に置いた。徳川家康は御所を斜めに眺められるところに壮大な二条城を築造して、自分の居場所兼天皇の警戒所にした。徳川幕府は京都の復興を援護したため、一七世紀末京都は巨大な寺院が多く築造され、絹織業などが華麗に発展した宗教・文化・産業の都市として繁栄を極めた。

近世の京都は中国・朝鮮・日本の間で盛んに行われた絹・人参・銀の貿易の最大の受惠地であった。朝鮮通信使の華やかな行列も京都を往来した。慈照院などの寺院には、彼らが残した詩文と絵画が多く所蔵されている。今日の京都の景観には徳川時代に作られたものが多い。近世、権力の中枢は江戸だったが、文化の中心は京都だった。

ところで、京都は明治維新を前後して政治の中心地として再び浮上する。明治維新の舞台がほかならぬ京都だったのである。しかしながら明治国家を誕生させた京都は、住民の抗議デモにもかかわらず、天皇が貴族たちと一緒に東京に移居すると、政治の中心からはずされる。

近代の京都の住民は危機を機会として活用し、失望から希望を産み出した。比叡山にトンネルを掘って琵琶湖の水を引き入れて発電所を建設し、運河を作った。そのおかげで京都は水運が発展し、アジアで最初に電車が走った。西陣などの伝統的な産業においても技術革新が起こり、京都は急速に近代都市として発展した。そのうえ、第二次世界大戦でも大きな被害を免れ、京都は「生きた博物館」として生まれ変わった。

近代の京都には日本が韓国を侵略し、また支配した事実を証言する遺跡も多い。三宅八幡宮には韓国合併奉告祭碑が立っており、韓国併合の偉業を祝って伝承する内容が刻まれている。韓国の侵略を企画した元老や支配した総督の別荘も多い。明治天皇の墓を造るときも、比叡山のケーブルカーを敷くときも、韓国人労働者が働いた。学校では新しい知識を学ぶために奮闘した韓国人留学生も多かった。京都帝国大学で博士号を取得し、教鞭を取っていた李泰圭と李升基は解放後、韓国と北朝鮮の科学の発展に貢献した。同志社大学で学んだ鄭芝溶と尹東柱は韓国人の情緒を最もよく表現した詩人として称賛されている。

京都の賀茂川の近くに高麗美術館という、在日コリアン鄭詔文氏が私財を投じて作った韓国文化の博物館がある。特に、日本で流通している韓国の美術工芸品が展示され、中には国宝級相当の珍品もあって、京都の文化水準を高めている。彼が西陣の労働者であったり、パチンコの経営者だったこと自体が近現代の韓日関係の歴史を象徴する。

京都のイノベーションから学ぶ智慧

今日、京都では茶道、書道、狂言、京舞など、歴史と伝統が染み込んだ芸能芸術が盛んである。多くの祭りや歳時風俗は、文化観光イベントとして名声を博す。他にも京都は、長年に

渡って研磨した技術を生かし、人間の生活を豊かにする商品を生産する。数年前、ノーベル化学賞を受賞した若い科学者は、京都にある島津製作所の研究員だった。世代を継いで進化する京都の文化には、京都人の自負心と誇りが溶け込んでいる。そのプライドが高すぎて、『京都ざらい』という本も出ている。

人口一三〇万人に過ぎない京都がどのようにして最高レベルの学問と産業を発展させることができたのか？ その答えは、古いものを活かして新しいものを作り出すノウハウ、つまり自分の文化と伝統を時代の変化に合わせて発展させていくイノベーションにあるということができる。法古創新こそ京都の歴史そのものであり、キーワードであろう。

韓国と日本は、古代から現代まで想像を越えるほど深く広い文明交流を積んできた。そのせいで、京都は、歴史に翻弄されながらも文明転換と自己革新を重ね、再生と繁栄の動力を作り出してきた。京都にはそれを雄弁に語る遺跡が数え切れないほどある。京都を訪れる観光客が、日文研で執筆した拙著を読み、韓日関係の広くて深い意味をきちんと理解すれば何よりだと思う。京都はえらい都市なのだ。

（ソウル市立大学教授）

わが母国、旅の断章

山崎 佳代子

片道切符でユーゴスラビアへ渡り、サラエボで留学生生活を始めたのは一九七九年の一〇月。ベオグラードに移り住み、三七年の歳月が流れた。内戦で多民族国家ユーゴスラビアは解体し、私の住む国の名はセルビアとなり、日本語と日本文学を教えて三〇年が過ぎた。この節目に、初めて半年を京都で過ごし、ふたたび母国と出会った。

ツツジに彩られていた六月の桂坂は、十一月には紅葉で麗しく、風が冷たい。虫の声も、鹿の切ない声も鎮まった。久しぶりの母国の半年。様々な人々、土地、舞台や絵画との出会いは、至福の時であった。平安神宮の初夏の薪能の炎、蕪村の眠る金福寺の木漏れ日、祇園祭の華麗なる峻厳。奈良の橘寺の古池、不退寺の樹木や草花。そして晩秋の京都、高桐院の松向軒の茶室の渋柿色。退蔵寺の僧如拙の瓢鮎図や金持院の長谷川等伯の猿猴捉月図。そして岡山の国吉康夫の「祭りは終わった」……。走馬灯のように情景が巡る。

日記帳を拡げ、小さな旅を記しておく。

一月二日

青空の朝、上田市に着く。上田電鉄は単線、小さな電車で塩田町へ向かう。車窓には山脈が青々と連なり、田畑が沿線に広がり、住人を失ったらしいアパートが、時折、現れた。塩田町からバスで森の入り口へ、そこから歩いて無言館へ向かう。

ドイツの日本学者ヴォルフガング・シャモニ氏が、無言館を必ず訪ねるようにと、手紙をくださったのは一〇月の初め。戦没画学生作品を収めた美術館。父のアルベルト氏は画家で、無言館でもその作品が展示された。丁寧な手作業で本をつくるチェコの出版社のために、数多くの書物の挿絵を手掛け、カフカの作品に挿絵を描いたほか、ゲーテを感動させたセルビアの口承文芸のバラード「ハッサン・アガの妻の悲歌」(KLAGEGESANG der edlen Frauen des Asan Aga: 一九三二年刊)などにも挿絵を添えた。しかし、第二次世界大戦が勃発、ナチズムの嵐に、画家アルベルトは東部戦線(ウクライナ地方)へ送られ、不帰の人となった。

小高い丘の上の無言館、窓から弱い光が流れ込み、若い画家たちが遺した作品が静かに呼吸する。順路の最初は、左手の壁の二枚の油彩。静岡県浜松市出身の中村萬平氏の遺作である。力強い裸婦の油彩「霜子」、画家の妻の像。もう一枚は、画家の自画像で、眼鏡の奥に意志の光を秘める。妻は暁介を出産した後、他界。妻の死を戦地で知った萬平も、満州の野戦場で病死、享年二七歳。父の遺した二枚の絵が、暁介の「父母」となった。

展示作品のうち、戦争を直接に主題としたのは「飛行兵士立像」と海で炎上した船の絵くらいで、作品の多くは、恋人や妻、姉妹、祖母や母を描いたものなど女性を描いていた。故郷や都会の風景、家族、自画像。それゆえに、過酷な時代が明らかになっていく。ガラスケースには、召集令状、絵筆や絵具、家族と交わした手紙、絵筆、戦死の報告に関する書類などが、控えめに時代を伝える。

アルベルト・シャモニの作品は、長い廊下に展示されていた。明るい庭から、緑の光が流れ込む。描かれた動物、植物、子ども。熱いお茶をいただき、カップで両手をあたたため、自由、夢という言葉を思い出していた。

一月三日

朝の代沢。電車で東村山市へ向かう。空が広々と明るい。新宿を過ぎるころ、電車は空いて、数人の乗客と陽光だけを乗せて走った。東村山市からタクシーで丸木原爆記念美術館へ。田畑が広がり、柿の木の実が光る。広い道を右へそれると、丸木夫妻の棲んでいた家が現れ、美術館は隣にあった。

最初の展示室は、丸木スマの作品。野菜、猫、草花がのびのび描かれ、心が洗われる。

次の空間からが、位里と俊の原爆の図。屏風画という伝統形式に、精密なデッサンで描かれた人々の群像が、仏教美術に様式化された朱の炎に包まれていく……。光を抑えた暗い画面の闇から、深い声が聞こえてくる。作品ごとに、俊が文章を添えていた。絵では表現しきれぬものを言葉で記さねばならぬほど、丸木夫妻が引き受けた課題は重い。

だが闇に一筋の微かな光を与えるものがある。それは美しさということ。命を失った肢体が折り重なり、樹木の枝にも息絶えた肢体が逆さに吊るされている。だが傷は暗示されるだけで、衣服を失った裸体は、均整がとれて神々しい。美しさとは、尊厳ということ。

「原爆の図」の連作の「救出」。裸体の傷を連想させるのは赤い色だけ。どの顔も気品がある。燃えさかる火を象徴する赤い空間から、静かな光に満ちた白い空間へと、疲れ果てた人々が移動する。担架に瀕死の者を乗せた男たちが先頭を行き、キツネ色の野良犬がうなだれている。赤と白の境のあたりに、若い父親が赤子を抱き、観る人を見据えるように、姿勢を正して立っている。逃れていく人の列の後方には、母と娘であろうか、正座して合掌している。「救出」に淡い光を与えるのは父の眼差し、母娘の両手だった。「救出」は、祈りだった。

窓のむこうに、都幾川が穏やかに光りながら流れていく。都幾川は、位里の生まれ故郷、広

島の太田川の上流の情景に似ている、と聞く。水は、遠い土地を繋いでいた。

一月二二日

早朝、広島へ向かう。「あなたは詩人だ。必ず、広島に行きなさい」。九月終わり、T先生がおっしゃった。行かなければならなかった町。初夏のような日。駅から路面電車に乗る。二人の姉妹と身体の弱い弟。母親が地図を確かめている。イタリア人らしい若い二人の旅人……。相生通りを行き、紙屋町交差点をすぎると、原爆ドーム前の駅に着いた。

視界に黒々と焦げた壁面が入ってくると、身体が震えた。荘厳……。見上げると、原爆ドームは青空を仰いで立っている。傍らにエノキの大樹が枝を拡げ、黄金の葉が陽光に、はらはらと舞い散っていく。赤茶けた鉄骨が、天空を切りとる。ドームの傍らを、元安川が流れる。ヒドリガモが水に潜り魚を探す。河岸をゆく人々に、急ぐ者はない。ベビーカーに眠る赤ちゃんを乗せたヨーロッパの家族は、語り合いながら通り過ぎていく。

ドームの柵の前に、青や緑のファイルが置かれ、自由に手に取っていい。原子爆弾投下に関する詳しい資料を収め、戦後の水素爆弾の実験の記録もある。ドームの木陰で、語り部が、母が被爆したという山を指さし、友達らしい人に当時の話をしていた。スペイン語、中国語、韓国語、英語、露語、仏語、独語など異国の言葉、そして日本語。異国の旅人たちが、ファイルを拡げ熱心に読んでいる。「この河ね、みんなが逃げてきたというのは」と、女の声がする。橋を渡った。

千羽鶴が飾られ、鐘がある。湯川秀樹の言葉、「平和を地に空に」が刻まれているというが、ここから見えない。原爆資料館を訪ねた。黄色い帽子の小学生、紺色の制服の中学生に混じり、抑えた光のなかで「物」たちは語る。子どもの眼差し、子どもの沈黙。

あの八月の朝は、建物疎開があり、学徒動員で作業に出た学童も犠牲となった。ガラスケースの中には、遺品があゝの瞬間を伝える。真っ黒に焼け焦げた弁当箱。破れた木綿のズボン。桃色の袖なしワンピースは、江木千鶴子（当時一歳八か月）が着ていた。国鉄の切符の日付は八月六日。六〇〇メートルほどの高さで爆弾は炸裂。閃光、熱風……。地面の温度は三〇〇〇度から五〇〇〇度。熱さは想像を超える。

資料館の長い廊下は、秋の光に満ちている。高校生たちと、録画された被爆者の言葉に耳を傾ける。「それは白い、白い光。マグネシウムを一度に焚いたようでした。芋畑をくぐりぬけ、みんな泣いておりました。みんな火傷。不思議で、不思議で、火事もないのに火傷。私はお寺で育ったから、小さなころから地獄絵は見えていました。あれは地獄の絵、地獄のとおりでした。赤色、黒、茶色と三色だけ。緑がないことだけが違った。いろんな声を出して人々が泣き叫んで、怒り狂うような炎でした。」と、一人目の女性。「うめき声、泣き声、叫び声。顔ではわからないから、衣類で見て回る。四つの人々の山の死体。あの朝、おはよう、と言って、それから光った。きれいな、きれいな光。それからすべてがみんな真っ赤に燃えていた。桜も、柳も燃えていた。火の海」と、二人目の女性。「歩いていくと、焼け焦げた電車があった。ステップに上がる。一五、六人が折り重なって死んでいる。撮ろうと思った。だがカメラのシャッターが切れない。裸で焼けただれて亡くなった人々を、撮れなかった。あの日は、夕方まで町を歩き回り、とうとう一枚も撮れなかった」と、写真家の男性。

それから原爆供養塔へ向かう。身元の分からぬ七万の霊が眠る。裏に回ると左手に、小さな石塔があり文字が刻まれている。宮沢賢治の「雨ニモ負ケズ……」だ。

橋を渡り、船を待つ。午後三時半、宮島へ。カモメに見送られ、旧太田川から広島湾に入る

と波は高まり、午後の陽光に無数の青い鳥影が現れ、次々と重なっていく。この海で、古の人々は神々と出会った。あの朝、神々は、どこにいらっしやったのか。

宮島は満潮。山は紅葉が深まっていた。海岸を歩き、石段を上り、豊国神社を訪ね、そこから海を見渡す。あの日の海は、どんなにざわめいたことか。石段をおりて厳島神社にむかった。長い回廊を行くと、最初に客（まろうど）神社がある。神の名の響きの美しさ。能の舞台がある。闇を照らす炎も役者も無いが……。薄闇から厳かに朱色の鳥居が浮かび上がり、細波に光がさざめく。宮島をあとにし、船で宮島口へ向かった。

宮島口から山陽本線で広島へ。電車は混みあう。小さな姉妹に席を譲る。姉が、「真っ赤な秋」を歌うと、妹も小さな口を一生懸命に動かす。ふと、原爆資料館の花模様のワンピースが想いに浮かんだ。広島駅に着く。姉妹の母は、私に礼を言い、女の子たちが元気に手を振る。小さな家族の無事を祈るように、小さな旅が終わった。

ベオグラードに戻るための荷造りを終え、トランクに鍵をかける。芭蕉の言葉を思い出した。「旅にして旅をすみかとす」。新しい旅が、また始まる。夜の桂坂。私は、森に耳を傾けていた。

（ベオグラード大学教授）

村上春樹はノーベル賞をとれるのか？

マッツ・カールソン

先日、このタイトルの川村湊の本に出会って驚いた。もちろんずっと前からこの問題について文壇で議論があることを知ってはいたが、一冊の本全体を要するほどまで重要極まりないとは想像もしていなかった。スウェーデン人であるため、時に日本のメディアにあなただの国で村上文学はどう見られているのかと尋ねられる。私はたいてい彼の本はファンの読者層の間で非常に人気が高いが、大学人や評論家の間では評価が分かれている、と答える。スウェーデンからの視点でこの問題について若干の考えを持っているので、この機会にそれを詳しく述べてみよう。

まったくの個人的興味から、私は村上の本のスウェーデン語訳が出るたびに大手とマイナーなスウェーデン新聞の書評欄をざっと読むことにしている。驚いたことに二〇一一年まで、個人的には凡作と思う『スプートニクの恋人』でさえ、ただの一本も否定的書評に出会わなかった。スウェーデンの書評者は全員、すべての新刊に圧倒的に好意的だった。ところが二〇一一年に何かが起こった。『1Q84』の出版と同時に多くの書評者は村上に背を向けたようだ。偶然だが同じとき、それまで彼の最大の応援者であった『ニューヨーク・タイムズ』でさえかなりきつい書評を出した。スウェーデンにもどると、『1Q84』が文学界のゲームの分かれ目になったかのようで、いわばそれが水門を開いたかのようになり、突如、村上作品に対する批判

が認められ、どっと流れ出した。しかし新聞は普通特定の著者に好意的な批評家に依頼するので、村上小説についても今も当然多くの良い書評に出会う。たとえばスウェーデンの地方紙『ウプサラ・ニーヤ・ティードニング』の書評者は、大人のためのハリー・ポッターにたとえつつ、『1Q84』を娯楽文学の傑作だとほめた。

一〇月の第一木曜日、スウェーデン・アカデミーがノーベル文学賞の受賞者を発表する日が近づく、スウェーデンの新聞編集部は書評者に今年の予想を尋ねるのを常としている。質問はたいてい三つあり、だれが受賞すると考えるか、だれに取ってもらいたいか、だれに取ってもらいたくないか、この三問である。『1Q84』以前は多くの批評家は村上を取ってもらいたいリストに挙げていたが、今は取ってもらいたくないリストに挙げることのほうが多い。特に女性批評家は男性批評家よりも批判がちのように見える。どういう言が最近現れているかを示すために、スウェーデン最大新聞『アフトンブラデット』の書評者のコメントを少し引いてみたい。二〇一六年の賞に関して、一〇月一二日号には（この年にはふだんより一週間遅れて受賞者が発表された）、一四人中四人の書評者が村上を取ってもらいたくないリストに入れ、だれ一人取ってもらいたくないリストに入れなかった。手短に理由を添えている。「村上文学は軽い夢、美しいけど束の間」、「村上はある神秘的な理由で、下馬評で最低のオッズしか取れない」、「村上文学はゴールまで達成しない、一歩前で止まる」、「村上は良い小説を書くが、あいにくかなり素朴な性差別にどっぷりつかっている」。この最後のコメントに見るように、多くの批評家は村上の女性描写（おっぱいの形の描写をも含めて）が性差別のステレオタイプに陥っている点を問題にしている。

それではいずれ村上は賞を取るのだろうか。なるほど多くの評論家は村上文学に背を向けた

かもしれないが、そんなことはスウェーデン・アカデミーと関係のないこと。スウェーデン・アカデミーについて皆さんがどう考えようとひとつ確実なことは、その会員がまったく大衆や批評家の意見から離れているということだ。彼らはトレンドや一般の意見をまったく気にせず、ただ自分の文学的な歩幅にしたがうということだ。それでもやはり、村上は受賞しないだろうと私自身は予測している。ストックホルム大学でアカデミーの二、三の会員を教師に持ったことから、彼らの文学趣味について私は一定の見識を持っていると信じている。私には、アカデミーの会員のうちの古老世代は今や八〇代、九〇代となり、モダニズム全盛の偉大な伝統の文学に浸って育てられてきたようにみえる（アカデミーは歴史的にモダニズムに肩入れしてきたが、受賞者リストには時にはまったくといってよいほど奇妙な選択があった。たとえば一体どうしてフランツ・カフカ、ジェームズ・ジョイス、ヴァージニア・ウルフは外れ、パール・バック、ウィンストン・チャーチルが入ったのか）。アカデミーの影響力ある重鎮であるシェル・エスピマルクは最近、一九四九年、いまだ世界の舞台で認められていなかったウィリアム・フォークナーの受賞は今までのアカデミー最良の選択だと指摘した。この意味で大衆文学者の側面を持つ村上が受賞したなら、驚きの選択となるだろう。反対にアカデミーの若い世代は、最近の文学トレンドを代表する村上タイプのポストモダン小説に一筋縄とはいわないがどちらかというともっと好意的であるかもしれない。

間違いなく、賞はたいいてい「難しい」作者に行く。大江健三郎が一九九四年に受賞したとき、私の日本文学の先生だった濱川勝彦はこんな笑い話を教えてくれた。受賞発表の後には日ごろの挨拶が「天気がいいですね」の代わりにしばらく「大江健三郎は難しいですね」になったというのだ。言いたいことは、もし村上が受賞しても「村上春樹は難しいですね」という文

句を誰も思いつかないだろうということだ。私の考えでは、村上はすばらしい語り部で大衆小説のユニークな作家だが、大衆小説はたいいすウェーデン・アカデミーの標的ではない。二、三のすウェーデンの新聞雑誌記事で述べたことだが、もしも村上がアメリカ人がイギリス人の作家であったならば、賞の候補に推薦されているかどうかは疑わしい。思うに西洋における批評家による彼の評価には「オリエンタリズム」の要素が絡んでいる。確かに川端康成を選ぶにあたっては別の意味でだが、同じ要素は絡んでいたと思う。この要素のために、村上小説はただ純粋な大衆小説とは違う何かと受け取られている。村上は多くの小説の中で、二つの平行宇宙を対比させる型という、彼のファンに非常に魅力的な文学図式でヒットを放った。「オリエンタリズム」的な読み方―暗示を含み計り知れぬアジア的神秘―とぴたりと合わせるように、平行宇宙を並べる好みは形而上学的か哲学的な深さを後ろに隠しているかのように読まれている。私見によれば、もしこれがたとえばアメリカの白人作家だったならば、純粋に大衆小説と読まれた可能性が高い。この言い方はやや裏切り含みで、たぶん陰謀理論に引かれるように見えるかもしれないが、一片の真理を含んでいると信じる。

もちろんこれは完全に私だけの独創的見解というわけではない。たとえばマサオ・ミヨシはやや似たことを『オフ・センター』で議論している。彼は三島由紀夫と村上を比べて二人の文学が西洋の想像力にとっての日本をパッケージしているという。「二人とも海外の顧客のために商品を特別制作している。三島はエキゾチックな日本、その国粹的な側面を陳列している。村上もまたエキゾチックな日本、その国際版を見せびらかしている。しかしどちらも日本観に心を砕いている。もっと正しくいうなら、海外の買い手が望むと想像する日本に心を砕いている」(二三四頁)。付け加えるなら、私は村上が三島ほど露骨には西洋をターゲットとしてい

いと考えている。あるいは、もしかしたら全然西洋のマーケットを視野に入れていないかもしれない。それにしても、西洋ではまぎれもなく特定の村上小説の読み方があるように思う。

最近、ここ京都にて日文研フォーラムで話す機会を得た。それは大隈良典がノーベル生理学・医学賞を受賞した日の翌日にあたった。一種の前置きとして聴衆に受賞のお祝いを述べ、数日中にもっと日本人受賞者がいるかもしれないと述べた。しかしスウェーデン市民として、村上に文学賞が行くことを応援しませんともわざわざ述べた。聴衆アンケートには次の興味深い回答があった。「村上春樹のノーベル賞授与反対と言われたことが理解できません。文学作品は、ノーベル賞で価値が左右されるものでありません。私は、彼の大ファンですがノーベル賞を受賞して欲しくありません。彼を批判することで、何かをなしたとする文化人の多い事を危惧します」(七〇歳以上、定年退職等)。ご安心ください！この場を借りて公式に弁解しておきたい。もし仮に村上春樹が受賞しても私は彼をもう一度批判することで、何かをなしたとは思いません。その時にはじっと黙っているでしょう。

(シドニー大学言語文化学部日本学科シニア講師)

原文…英語

翻訳…細川周平 (国際日本文化研究センター教授)

日本の美術館の魅力

バーバラ・ハートリー

京都は本当に綺麗な街である。日文研の外国人研究員のフェローシップをいただいた際に、このような伝統がある町に一年間住むチャンスに恵まれ、本当に有りがたく思う。そして、京都に来る前に「日文研にいる間に、もちろん研究は優先するけれども、毎週日曜日に必ず仕事を休み、いろいろなお寺や名所に行こう」と自分に約束をした。日文研のフェローシップが始まったのは六月三〇日で、既に真夏であった。京都の夏は人間が生き残れないぐらい暑い。京都の名所は観光客で動かないほど混み合っており、観光地の食事はまずいのにか高い場合もある（二〇一五年には京都が世界一の観光地として選ばれたので、観光客が急増した）。それでも名所の見学を頑張ろうと思った。自分が観光客として京都に来て、様々なお寺などの見学ができたので京都の魅力がよくわかったように思う。初めて日本に来た時から非常に親しみをもっていた平等院も再度訪れた。平安時代の平等院の状態を復活させた境内の中にある博物館に感激した。伏見稲荷大社の長く並んだ鳥居を通り過ぎると、周りの森の環境を美しく感じた。東寺で弘法大師が入寂したとされる三月二一日に因んで、毎月二一日に開かれている市場にも行って、幅広く並べた骨董品にも魅力された。そして、今まで見るチャンスがなかった祇園祭にも参加する機会を持ち、心から嬉しかった。ただし、いくら素晴らしい光景であっても、人ごみに圧倒され、夏バテになり、ちょっと大変なところもあったのだけだ。

偶然なのだが、祇園祭の山鉾行列が終わってから、日文研の図書館に所蔵されていない本を調べるために、京都府立図書館に行くと、周囲にそれまで気付かなかった二つの美術館を見つけた。それは私の京都滞在を非常に楽しくしてくれた。

京都だけではなく、日本で一番魅力的なのは美術館じゃないかと思っている。ヨーロッパや北米から来た人にはそうでもないかもしれないが、私のように人口が少なく歴史も浅いオーストラリアから来た人にはそうである（この間、友人のオーストラリアの大学教授に引率されて初めて日本へやって来た学生に「日本にいる間に行くべきところは？」と訊ねられて、何のためらいもなしに「美術館」と答えた）。中世、近代、現代、どこをとっても日本の美術館には優れた作品がいっぱい展示されている。そして、日本人画家、彫刻家の作品だけではなく、世界中から集められた傑作が並べられている。

二〇一六年の秋、京都では二つの素晴らしい展覧会が開かれた。どちらも日本の美術界の豊かさをはつきり表すのではないだろうか。九月から十二月まで、京都国立近代美術館（MOMAK）でメアリー・カサットというアメリカで生まれ、パリで画家として活躍していた印象派の女性画家の展覧会が行われていた。カサットは、母親が赤ん坊、子供などを抱く表象を描く画家としてよく知られている。数年前に北米のボストン美術館でカサット作品を三、四点を見ることができたが、今回は百点以上を鑑賞することができた。その中には、もちろん典型的な「母子」のイメージがたくさんあったが、私にとって一番面白かったのは、日本の扇子が表された絵画であった。よく知られているように、ジャポニズムという西洋人画家などが日本の美術スタイルなどに憧れを表した現象があって、ゴッホ、ロートレックなどに強い影響を与えた。カサットがパリに行った一八六二年はジャポニズムの頂点で、彼女にまでも影響が及んだようで

ある。私が見た日は、鑑賞者が非常に多かったが、誰もが静かにその印象派女性画家の傑作を楽しそうに見ていた。カサットの作品だけでなく、そのような満員のなかを鑑賞する人々を拝見することができて、楽しさは倍増した。

カサットは西洋近代美術を代表するが、美術館を出ると道の向こう側の京都市立美術館では、日本伝統美術の代表である伊藤若冲の「KYOTO 若冲」という展示会も開かれていた。私の研究分野はかなり近代、現代に偏っているので、中世の日本美術などにそんなに詳しくないが、数年前には四国にある金毘羅さん（固く呼ぶと金毘羅宮）と愛称された神社に行って、若冲によって描かれた圧倒的に美しい花の絵を拝見する珍しいチャンスを得た。金毘羅さんは非常に面白い神社で、金丸座という回転舞台を持つ日本一古い歌舞伎劇場がそばにある。境内には数々の美術品の宝庫があって、その中には円山応挙や伊藤若冲の作が入っている。その時に拝見した応挙作品は虎の表象で、実物そっくりのイメージであった。ニコニコ笑っているはずらっぽい表情をしている虎もいれば、恐ろしく猛獣的な格好している虎もいた。だが、大変驚かせられたのは、応挙という画家が生きている虎を見たことがない、と言われたことである。本物を見なくても、そんなにうまく描くのは本当に天才だと思わずにはいられなかった。絶滅の危機にさらされている虎は、もしかしたら私の一番好きな動物かもしれないので、応挙の虎を見られて本当によかった。だが、その応挙の虎よりも、若冲の樹花の図は信じられないほど見事だった。特に明昭元（一七六四）年に描かれた「花丸図」という作品は素晴らしく、産経新聞では「丹念に描かれた花々がコマ割りにおさまられているかのように規則正しく並び」と評された。

金毘羅宮で花図を見て、若冲の画家としての天才的な才能が分かったので、京都市立美術館

で開かれていた展覧会をいよいよ見に行こうと思った。さすが京都、展示の中心は若沖が描いた京都の風景などであった。特に魅力を放っていたのは鶏の図であった。応挙の虎と違って、若沖は本物の鶏を確かにその眼で何百回も見ることがあっただろう。だが、そのような無数の鶏のバリエーションを作り出せることも、天才だと思った。生誕三百年記念が日本全国で祝われた伊藤若沖の「KYOTO 若沖」の展示も日本の美術の素晴らしさの証ではないだろうか。余談だが、市立美術館の名前を変更する可能性があるという話を最近聞いた。京都市民にとって大事な施設を民間企業の名で知られるようになるかもしれないと聞き、ちょっと気の毒に思った。「市立」美術館とは、市民が所有している設備という意味で、そのような文化の共同的所有権は民主主義の特徴の一つではないだろうか。その所有権を失うのは、深刻な問題になるだろう。

さて日文研では「昭和期における大陸表象、——物語と視覚イメージ」というテーマで研究し、そのおかげで今まで殆ど日本近現代文学の分野で活躍していた私が日本の美術研究界と結びついて、大変うれしく思う。毎月どこかの美術館に行くのは、大変有意義で楽しい体験であった。例えば、広島市現代美術館で「1945年-1955年」という展覧会では、最近はかなり人氣を呼んでいる藤田嗣治の戦争画の一枚を初めて見た。「好き」という反応がなくても、その画家の、戦争のひどさを表象する才能を認めざるを得ない。戦争協力者なのに、藤田の戦争映像は日本人にとっても、世界中の人々にとっても戦争の空しさ、戦争の意味が全くないことを表す非常に大事な作品ではないだろうか。後に東京都美術館で、藤田が描く子供の絵も見て、ちょっと不穏な印象を持った。その子供が現代画家の奈良美智の子供とそっくりなのだ。「あ、

奈良が藤田に影響されたのかな」と思い、「藤田がその不気味な子供をやめて、戦争画にこだわった方がよかったのかな」とも思った。広島では他に桂ユキという女性画家の作品に興味を惹かれた。一九三〇年代前半を通して藤田のような画壇の男性画家から指導を受けた桂ユキは、一九三五年あたりから、コルクや葉っぱなどをキャンバスに貼り付けて、コラージュ作品を作り始めた。そのコラージュ的な絵画の印象は非常にパワフルで心に刻み込んでいた。ジェンダー研究に随分前から興味を持っていた私は日文研に在籍する間に、できるだけ女性作家、女性画家のものを調べて、彼女たちについての文章を書きたいと思っている。

女性画家といえば、松村綾子という画家もいた。仙台市生まれ、京都府立第二高等女学校に入ってから大隈関西で活躍していた。一九四〇年に京都市展の委員になって、二科会会友にもなったことがある。人物も静物も風景も魅力的に描いた画家で、一九三七年に描いた「影」という作品は、当時の不安状態を非常にうまく捕えた映像である。ちょっとシュールレアリスム的な絵で、前景が背中を向けながら跪いている着物姿の女性で埋められて、左には科学の記号の顕微鏡がある。背景は曖昧なのに、都市空間のような左側がだんだん荒地に重なって、何か脅迫的な印象が与えられている。戦時下の京都の女性画家の中では、西田幾多郎の三女静子も活躍していた。父親は日本を代表する哲学者なのに、静子はマイナーな画家で生年月日も不明のようである。だが、絵が綺麗で美術的な才能に恵まれたと思う。

藤田嗣治の話から明白であるように、日本の二十世紀の美術は不可避的に戦争と関係がある。戦争関係の絵画を描いた女性画家に、富山妙子と丸木俊がいる。二人とも、日本の戦争責任を認めて、自分の絵画を通じて戦争の残酷さを表していた。妙子は中国の東北地方の哈爾濱（ハルビン）で育ち、地元の少女となかよくなって、戦後に「自分も戦争の加害者だ」と

気づいて、自分の美術を通じて、どのように帝国日本が植民地の人々を圧迫したかを表してきて。俊は夫の丸木位里といっしょに、世界中でよく知られたヒロシマの水墨画を創作して、二十世紀の大変な戦争犯罪の一つ、広島原爆投下の犠牲者の体験を半ば事実的に、半ばシュールレアリスム的に描いた。夫は広島生まれなので、その夫妻には、原爆の影響がよくわかったのである。だが、だんだんいろいろな話題を取り上げて、水俣画も描き、沖縄戦画も創作した。広島画の価値はもちろん高いが、大日本帝国軍が犯した南京残虐の画はいくら恐ろしくても、ただ印象に留まるだけで終わってしまうかもしれない。四メートル×八メートルの衝撃的な大きさで、画の右側には五、六人の日本兵士に犯された裸の女性の姿が見える。丸木夫妻はチームとして絵画を描いたというが、陵辱を受けた女の画は俊が一人で描いた。来日前にその画の存在を知り、本の図版を何度も見ていたが、今回の滞在中に埼玉県はかなり不便なところにある丸木美術館で実物を直接見ることができて、ありがたく思う。

外国人として日本の美術館に行く際には、若干美術館係員に迷惑をかけることもあるかもしれない。日本語の知識も、マナーの知識も足りていないからだ。しかし、助けてくれる人もいっぱいいるし、丁寧ないろいろと説明をしてくれる人もいる。その人たちのお蔭で、日本の美術界に楽しく入らせていただいて、すこしだけでも日本の美術を鑑賞させていただけることになった。外国人の研究者のフェローシップをいただいた日文研にたいしても、心よりお礼申上げる。

(タスマニア大学校シニア講師／国際日本文化研究センター外国人研究員)

濟州市方言との出会い

鄭 相 哲

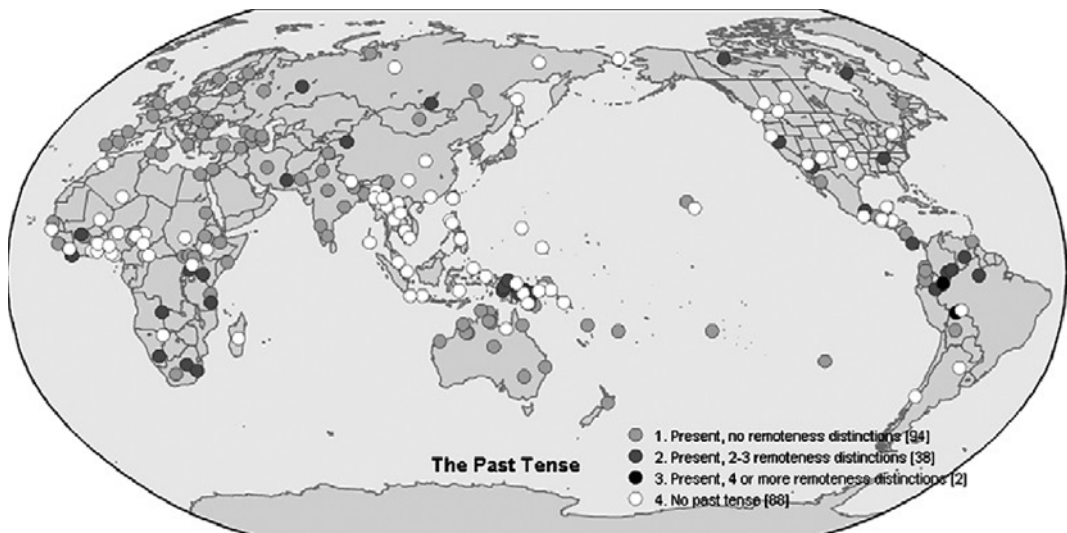
韓国濟州道は三多道ともいわれる。つまり、風と石と、そして女性が多いという意味である。しかし、長い間本土と地理的に歴史的に孤島していたので、気候や文化や食べ物にも非常に個性的な特徴があり、言葉、言い換えれば濟州方言も共通語だけではなく、他方言と比べても異質的なところが多く面白い。私が濟州市方言を研究対象にするようになった背景には、三つの前提があったような気がする。

まずはWALSである。二〇〇五年頃言語類型論という言語学の研究分野から、Beard S. Comrieを中心とした国際的な研究者達の共同研究の成果の一つとして、WALS (world atlas of language structures : <http://wals.info>) が発表され、学界から注目された。現在は誰もが簡単にアクセス可能であるし、最新情報もアップデートされ続けている。一つだけ紹介すると、過去テンス (tense) を例にしてみよう。共通語として日本語は「シタ」という一つの形態しか持たないのに、世界言語の状況を次の地図に表示されているように、二つも三つも過去時制形態を持つ言語が存在し、しかも分かりやすく一目瞭然で驚かされる(その理由は問わないとしても)。当時私の場合もその成果に圧倒されてやや知的な興奮状態に陥り、言語類型論という分野に強い関心を持つようになった。図一はそのなかから過去テンスについての世界地図を引いたもので、一つしかない言語から四つ以上ある言語までいろいろある。

第二は、日本の方言研究の成果である。概略二〇〇〇年頃に入ってからテンス・アスペクト・ムードについての体系的な大規模な方言研究が進められ、その成果が公刊されてきている。以下現在熊本県松橋町で用いられている方言の例であるが、工藤編（二〇〇四）によると、この方言では「一時性」をマークするために二つの形容詞の形があるという。

- ・アラスカワ サンカ（アラスカは寒い）
- 〈恒常的本質〉
- ・キョーワ サンカリヨル（今日は寒い）
- 〈一時的現象〉

この方言では動詞連用形に「しよる」という形態がついて主に「動作継続」の意味を実現するが、この形態が形容詞にもついて一時的な現象を表わすという。この現象が注目される理由は単に共通語と違うというのではなく、韓国濟州市方言の形容詞にも同様な現象（하임찌）があるからであり、さらに



図一 過去テンス

は世界の他言語との共通性が見られるからである。

- He is/is being kind.
- O carro está limpo. (その車はきれい (な状態) です)
- Os senhores são japoneses? (あなたがたは日本人ですか?)
- 지로얼굴 별것 없다 / 별것 하다 / 별것 아염져. (次郎の顔、赤い) (済州市方言)

英語 (特に黒人英語でよく使われるようであるが) では be 動詞を重複して使うことで傍線の方 (He is being kind) は〈一時性〉を表し、「親切なふりをする」といった意味になる。次はポルトガル語 (スペイン語) の例であるが、よく知られているようにこの言語では estar の方が〈一時性〉を表わし、ser の方が〈恒常性〉の意味を実現するという。

このように〈一時性〉と〈恒常性〉という時間的限定性に関わる現象は、日本語や韓国語など個別言語の特殊な現象というより世界諸言語で観察される現象であると言えそうである。

第三に、大学院博士課程に済州市出身の学生が入ったことである。その学生と何回かにわたって済州の文化や方言、食べ物などについて話し合っているうちに、済州市方言のテンス・アスペクト・ムードといった述語構造が韓国共通語とあまりにも違うのに気づき、本格的に方言調査をしたくなったのである。

沖縄には「ウチナーヤマトグチ」という言葉がある。戦後沖縄で用いられるようになった新しい方言のことを指す言葉である。直訳すると、ウチナー (沖縄人) + ヤマトグチ (標準語) ということになるのだろう。済州市方言も沖縄首里方言との共通性が多い。例えば、歴史はと

もかく、地理的に交通が不便な島であり長い間本土から孤立していて、古い形態を保持している点や、その影響が分らないが、首都発の共通語から見れば、外国語のような印象を与えている点などである。また、マスコミや交通の発達で共通語化が急速に進んでいることも類似している。「ウチナーヤマトグチ」という言葉もこのことを象徴しているし、その反映であろう。二〇一〇年頃、筆者が済州市に行った時、伝統方言の話者を探すのに苦労した記憶がある。当時既に八〇歳以上で島から離れたことがないインフォマントを見つけるのはなかなか難儀なことだった。今は八六歳以上の方々ということになる。このことは裏を返せば、伝統方言の話者がだんだんなくなりつつあるということであり、その方言が消滅危機に面しているということになる。昔から方言を禁止したり、方言で言うとは恥ずかしく思ったりしたことはよく知られていることである。しかし、個々の方言もそれぞれ立派な語彙や文法体系を持つ立派な一つの言語であり、無形文化財の一つである。

参考文献

- 工藤真由美（編）『日本語のアスペクト・テンス・ムード体系―標準語研究を超えて―』ひつじ書房
二〇〇四年
- Martin Haspelmath, Matthew S. Dryer, David Gil, Bernard Comrie (eds.) *The World Atlas of Language Structures*, Oxford University Press, 2005.

（韓国外国語大学教授／国際日本文化研究センター外国人研究員）

公用語について

佐野 真由子

さまざまな種類の国際会議を経験するたびに、その公用語について考えさせられる。多少乱暴に、ひとことでまとめるなら、私は、全参加者が母国語で発言できることが望ましいと思っている。そして、そのための通訳の導入に躊躇は不要であると考えている。幼いころからバイリンガル教育を受けたなどの例外的なケースを別として、外国語での発言は、どれほどその言語に熟達した人でも、母国語の場合と比べ、表現しきれない何かが残るのが普通だろう。一人の大人として、場面に向き合いきれないこともある。言語の確保は、参加者間の対等性の確保である。

だが、たとえば、せっかく日英両語の使用が認められている会議で、「日本語で発表します」と言うのと、「英語でできるでしょうになぜ？」という反応が返ってくるのがたまある。あるいは会議の企画者として、参加してくださる方に「通訳を入れるので日本語でお話しになっていいですよ」と言うのと、「英語でできます！」と抗議の意を含めた返答を受けることがある。そうじゃないのに……と思う。

「共通語」としての英語にはむろん存在価値がある。いま、そしてこれからの時代、好むと好まざるとにかかわらず、使うべきときに英語を使えることは、すべての人にとって必要な能力であるに違いない。費用面の理由もあって言語を一本にしほらなければならないときは、や

はり英語を選ばざるをえないことが多いのも現実である。それが常識だという声もあろう。しかし、英語を使うから「国際的」なわけでも、そのほうが上等なわけでもない。

すべての参加者が対等に、心置きなく縦横に発言できること。大切な知見の交換が行われる場で、これ以上に重要なことがあるだろうか。

振り返ると人生のいくつかの段階で、英語、またはその他の国際共通語について、考えを揺さぶられてきた。前提として、私はまったく平凡に日本で育った日本語話者だが、子どものころは、「ネイティブ・スピーカーのような発音」こそ良しとして英米文化とともに吸収させるという常識的な英語教育を、ただ楽しく受けていたと思う。通っていた学校は、その点でとくに積極的でもあった。

別の発想を持たされた最初は、大学二年生のときの授業である。アガサ・クリスティー原作の名画「ナイル殺人事件 (Death on the Nile)」を見ながら、世界各地からやってきてナイル川クルーズに乗り合わせる人々の、訛りの強い英語を聞き取るという、なんとも楽しいプログラムだった。これを考案された先生の主旨は、こうした多様な英語に出会っておくことが実用性につながるということにあったらしい。しかし、私はこのとき同時に、英語という「共通語」を挟む限り、そのネイティブ・スピーカーと、「訛りの強い英語」を話す人々との間に、非対等が再生産され続けるという文化的示唆を、静かな衝撃とともに受け取ったように思う。

翌年、(第一次)湾岸戦争が起きて、日本のテレビとしてはかつてないほど多くの中東の人々が、次々と画面に映し出された。彼らはカメラの前で、「ネイティブ・スピーカーのような発音」とはまったく違うアラビア語訛り丸出しで堂々と英語を話し、自らの主張を展開して

いた。それは「ナイル殺人事件」の文脈ともまた異なり、彼らが現代世界の現実に対峙して、「共通語」としての英語を強靱に乗りこなしている姿は、当時の私の目に美しく映った。英語とのそのような関係をこそめざしたいと、強く思ったのを覚えている。

が、その後のイギリスでの大学院生活では壁にぶつかった。それ以前に就いていた仕事で英語を使う機会も多く、大きな問題はないつもりでいた自分の英語力など、どっぷりと「ネイティブ・スピーカー」の世界に身を浸し、さらにアカデミックな議論についていかなければならないとなれば、十分というには程遠いことを思い知った。「英語との関係」などを考えている余裕はなかった。書き言葉においても、期末試験の回答ですら「英語の散文として美しい」とを求めるといふケンブリッジの伝統（と説明を受けた）は貫徹された。外国人留学生への考慮はなかった。あのときのつらさは、言語の面にとどまらず、異文化というものに対して——圧倒的な異文化の前で自分を立ち上がらせていくということにおいて——、ずいぶんと私を鍛えてくれたと思う。

そして、数年を経て勤務するようになった、パリにあるユネスコ（国際連合教育科学文化機関）本部の言語環境は、他ではとうてい経験することのできないものであった。ここでは大きく分けて二つのレベルで、言語はあからさまに武器として機能していた。

一つは、本部事務局で働く国際公務員としての、日々の仕事、同僚との付き合いのなかでのことである。

ユネスコの日常業務における公用語（working languages）は英仏二カ国語である。いずれの国連機関でも公式には同じだが、実際にはほぼ英語のみになってしまっている場合がほとんどであるのに対し、ユネスコは本部事務局がパリにあり、いわゆる一般職（General Service）の

スタッフの多くが現地採用のフランス人ということもあって、「英仏二カ国語」態勢がまだ現実に生きている。両語は完全に混在しており、同じ会話に参加している人々の誰かは英語で話し、誰かはフランス語で話す。また、一人が話す言語が無意識のうちにくると変わることもある。

業務上のメールや書類も、書き手やそのときどきの都合によって、二カ国語のいずれかで発信される。約一九〇カ国から集まっている専門職 (Professional) のスタッフのなかには、英仏語をまったく同じレベルで操れる人もいるが、多くはそれぞれに得手不得手があり、ともかく情報を受ける場合に両方の言語を解することができれば、発信は得意なほうですればよいという形で仕事成り立っている。

各人がどちらの語を主に使用しているのかは、一緒に働いていればお互いにわかる。そこで、職場内での各種のミーティングや同僚どうしの日常会話は暗黙のマナーとして、その場の顔ぶれを見ながら、英仏いずれかがとくに不得意な人がいれば、もう一方の言語で進行するのが通常であった。しかし、それを裏返しにした「意地悪」が行われることも少なくなかった。

私の見た最も凄まじい場面は、所属していた文化遺産部に新部長が着任したときのことである。ナイジェリアの人で、フランス語がまったくできないことは事前に知れ渡っていた。「まったく」できないというのはユネスコにおいては特殊ケースだが、任命に政治的考慮が働く上級管理職の場合には、ありえないことではない。今後の文化遺産部は英語での会議が多くなるだろうという、悲喜こもごも入り混じった予測も飛び交っていた。そして、実際の着任を受け、部の全職員が広いホールに集められ、進行中の各プロジェクトについて新部長へのブリーフィングが行われたのである。

冒頭で、その上司にあたる文化局長（アルジェリア人）が英語で歓迎の辞を述べ、退出すると、いよいよ本題の実務的な話が始まった。文化遺産部には当時三課があり、壇上の部長に説明をするのは各課長である。参考までに、三人はフランス人、オランダ人、イタリア人で、本来に英語ができなかったフランス人課長を除き、後二者は、英仏語のいずれも人並み優れて流暢に話す人たちであった。が、三人は、次々と、そして延々と、フランス語で話し続けた。二時間か、三時間にも及んだろうか、聞いているわれわれスタッフが凍り付いているのをよそに、「吊し上げ」の儀式は続いた。

さて、もう一つのレベルとは、ユネスコ加盟各国の政府代表が集結する総会等の公的な意思決定の場である。テレビに登場する機会も多いニューヨーク国連本部の会議場を見たことのある方も多いと思うが、パリのユネスコ本会議場もこれとそっくりの空間である。

周知のとおり、こうした場で使用される国連公用語（official languages）とは、英語、フランス語、スペイン語、ロシア語、アラビア語、中国語の六カ国語である。広い議場を約一九〇カ国の代表団が埋め尽くし、壁面上方の六つのブースにずらっと通訳が入った様子は壮観のひとことに尽きる。すべての発言は、直接、またはいったん別の言語を通して、瞬時に他の五言語に移される。文字どおり最高レベルの通訳者が揃えられている。

が、六カ国語分の通訳がスタンバイしているということは、逆に、当然ながら、すべての発言者はそのいずれかの言語で発言しなければならないということである。六カ国語のうちに自身の母国語が含まれる国と、そうでない国の発言力の差は、歴然としている。そしてここでも、「意地悪（ないし失礼）」は行われる。私は事務局として出席していたある会議で、日本の代表団が英語で発言したのに続き、イギリス代表団が挙手して公式に一回の発言機会を求め、

「日本代表団の英語が下手で何を言ったのかわかりませんでした」と述べるのを聞いたときの驚きを忘れることができない。(実のところ、その発言者の英語は本当にひどかった。そのような場合でも通訳は完璧に聞き取って訳してくれるので——まさに「ナイル殺人事件」の面目躍如だ——同時通訳レシーバーを通じて別の言語で聞くとわかるということがよくあるのだが、イギリス代表団ゆえそのまま英語で聞いていたという不利はあろう。)

ただし、このような意地悪の対象になりうる国は、必ずしも多くはない。「六カ国語のうちに自身の母国語が含まれる国」は実のところ、非常に多数にのぼるからである。正式な母国語でなくとも、ほぼ母国語のように使いこなせるレベルまでを含めれば、その数はさらに増える。英語に対するイギリス、アメリカ、そしてオーストラリアやカナダはもちろん、アフリカ、アジア、中米の広範な英語圏、同様に、フランス語に対するフランス語圏……。だからこそ、これら六カ国語が抽出されているのであり、そこには実用性が伴っている。その実用性は、植民地支配の歴史に支えられている。

他方、この場での中国語の存在は特異である。六つ並んだうちの中国語通訳ブースは、明白に、中国代表団だけのためにある。一九〇カ国のなかで、彼らが発言し、また他の発言を彼らに聞かせるためにのみ、六分の一の通訳が奉仕する。この究極の「特別扱い」は、現場で眺める者に陶醉感さえ抱かせる。ここにも、第二次大戦終結時における世界の構図の一端が表現されている。

また、少し「公式度」の落ちる会議では、公用語を英仏二カ国語にしぼるようなケースもある。つまり、ユネスコ本体側の費用で用意される通訳はそれら二カ国語のみということである。そうすると、前記の日本に似た弱い立場に置かれる国はとたんに増えるはずなのだが、こ

こは旧宗主国の「親心」の見せどころ——たとえばスペインが予算を提供し、スペイン語通訳を入れることによって、スペイン語圏諸国が母国語で発言できるように計らう、ということが少なからず行われる。スペインはそれら諸国から非常に感謝され、発言の際にわざわざ謝辞を述べる国も多い。母国語を使用できるかどうかが会議での発言力を大きく左右する以上、その感謝自体は自然である。しかし、そこに立ち現れるのは、「かつての世界」以外の何物でもない。（なお、母国語が国連公用語に含まれない国が、会議における自国のみの便宜のために自国語の通訳を雇い入れることは、自身で予算を負担する限りいつでも許容されている。が、費用が高額になるため、実際に行われることは稀である。）

言語は、政治であり、刃であり、そして何よりも、歴史である。

ここで氷山の一角を紹介した私の経験がいささか特殊なものであるとしても、これらの場面にじかに接した者として、その戦慄を忘れて仕事をすることはできない。それで私は、母国語にこだわる。むろん、国際シンポジウムなどの場で、多少の不十分を補い合いながら英語で議論することも楽しい。それも学術的営為のうちであるという意見にも反対はしない。とはいえ、そこからは、世界を本当に対等な場にしていくことはできないと感じている。

多様な母語を持つすべての参加者が対等なネイティブ・スピーカーとして、心ゆくまで発言することができるように、自分が企画する小さな会議になんとしても通訳を入れる——たとえばそんな戦いの積み重ねから、少しずつ世界を変えることができると、信じたい。

（国際日本文化研究センター准教授）

南十字星の下の海外シンポジウム

郭 南 燕

二〇一六年一月二三日から二六日まで、ニュージーランドのオタゴ州首都ダニーデン市 (Dunedin) にあるオタゴ大学 (University of Otago) との共催で、「南太平洋から見る日本研究・歴史、政治、文学、芸術」をテーマとする第二三回の日文研海外シンポジウムを開催することができた。

オタゴ大学は、一八六九年設立のニュージーランド初の高等教育機関で、当時の移殖民 (ヨーロッパ人と華人) が南島のオタゴ州で開拓した金鉱業で蓄積した富によるものである。四つの学部 (人文学部、理学部、医学部、商学部) をもち、完備した科目を誇るこの世界最南端の大学は、ニュージーランドの他大学より遅れて、一九九三年二月に日本語プログラムを開設した。それに尽力した私は、未熟のため、苦しくて寂しかった。慰めてくれたのは、毎晩仰ぎ見る銀河と南十字星のかすかな光であった。

在職一五年間、同僚たちとの協力で、日本語 (初級・上級)、日本の文学、映画、社会事情などの講義を提供し、学士、修士、博士学位を授与し、優秀な学生を輩出することができた。日本研究の発展は、一九九六年に日本語科に赴任したロイ・スターズ先生と、二〇〇四年に歴史学科に赴任した将基面貴巳先生に負うところが極めて大きい。

今回の海外シンポジウムは、将基面教授 (歴史学科長) との一年半の共同準備を経て、

ニュージーランド、豪州、フィジー、米国、日本からの研究者の参加を得て開催することができた。シンポジウム前日（二三日）は、シンポジウムの幕開けとして、米国ペンシルヴァニア大学のフレデリック・ディキンソン先生の公開講演「The First World War as Global War: Japan, New Zealand and the Dawn of an Asia/Pacific World」が行なわれた。第一次世界大戦への関わり方を通して、ニュージーランドと日本が地理的に遠く離れているにもかかわらず、政治的、経済的に密接な関係を百年以上保ち、アジア太平洋の全体性を作り出していたことを教えてくれた。

二四日と二五日のシンポジウムでは二つの基調講演があった。初日には日文研小松和彦所長から「ミクロネシアの離島で日本文化を考える——妖怪譚を中心に——」と題した講演を行い、三〇年前に科研費によって約一〇年間にわたって調査したミクロネシア諸島のキリスト教導入前の家族関係と怪談を紹介し、そこから日本の家族と民話を眺め直して、社会の基本的人間関係への理解がその国の歴史、伝統、文化への研究といかに関係するかという「異文化理解の心得」を示唆する内容であった。この講演は、妖怪研究を大成させた「小松学」の出発点の回顧と整理のきっかけにもなっている。

二五日にはオークランド大学のマーク・マリンス教授から「Public Intellectuals, Neoliberalism, and the Politics of Yasukuni」と題した講演があり、靖国問題に対する日本知識人の態度の変遷を辿り、日文研創設者の一人で現在も顧問を務める梅原猛先生の公式参拝への長期に渡る反対意見を紹介し、日文研関係者にとって印象深い内容であった。

二日あわせて六つのセッション「日本の古代歴史と文学」「江戸時代の社会と文化」「現代日



ヘレン・ニコルソン教授（オタゴ大学）へお土産を渡す小松和彦所長

本の政治と思想」「太平洋諸島と日本」「近現代日本文学と社会」「日本のテレビ、映画、大衆文化」があり、合計二三本の発表があった。中心テーマ「南太平洋から見る日本研究」を反映するように、ディキンソン先生の公開講演と小松先生の基調講演のほか、オタゴ大学のグレン・サマーヘイズ先生の「An Austronesian Presence in the Sakishima Islands: an Archaeological Update」は、先史時代の沖縄先島諸島に残るオーストロネシア人の遺跡を通して、太平洋民族の移動の考古学的資料を紹介し、ディキンソン先生の「“Nanyō” in the Rise of a Global Japan, 1919-1931」は戦間期の日本に与えた南洋の政治、経済、軍事の影響力を究明し、オタゴ大学のジュディ・ベネット先生の「After the Plane Crashed: Reactions to the Deaths of Japanese World War II Internees at Whenuapai, New Zealand」は第二次世界大戦中のニュージーランド抑留日本捕虜の飛行機遭難事件がい

かに闇に葬られたのかを振り返った。フィジーの南太平洋大学、リョータ・ニシノ先生の「Toward a Future of Travel Writing and History: Collecting, Researching and Reflecting on Southwestern Pacific Islanders' Experiences of the Pacific War」はパプア・ニューギニアとソロモン諸島への日本軍侵略の史実がいかに現在の日本人旅行者に語りかけられ、記録されているのかを考察した。関西大学のアレキサンダー・ベネット先生の「A Study of Japanese Martial Arts in New Zealand up to the Second World War」は日本の柔術が一九世紀末期からイギリスと米国を経由してニュージーランドに輸入されて広く歓迎されたことを、新聞・雑誌の記事と映画を通して論述し、オタゴ大学のヘンリー・ジョンソン先生の「Japan in New Zealand: *Taiko* and Identity in Transcultural Context」はニュージーランドにおけるさまざまな和太鼓の演奏グループの状況を紹介し、二〇一五年のオタゴ大学の卒業式に和太鼓の演奏があったことを教えてくれた。以上のように、多方面から日本と南太平洋との歴史的、地理的、民俗的、政治的、軍事的、文化的関係に議論が展開された。

他のセッション発表も、日本の歴史、政治思想、文学、大衆文化を取り上げ、高い水準を示している。発表順序にしたがって紹介する。ウェリントン・ヴィクトリア大学のエドウィーナ・パルマー先生の「Bronze Bells in Early Japan: "Swallowed" by the Mountains? A New Interpretation of Their Ritual Purpose」は古代日本の銅鐸の語源を探り、その儀礼性への新しい解釈を試み、オークランド大学のエレン・ナカムラ先生は「Yamawaki Takako's Bittersweet Memories of Uwajima Castle, 1864-1865」はシーボルトの孫娘山脇高子が宇和島城で過ごした意味を分析し、豪州マードック大学の森山武先生の「一九世紀前半の社会変化と辺境への知の流れ——佐渡人柴田収蔵の読書と遊学、地図製作」は、佐渡出身の知識人の作成した世界地図の影響範囲を論

じたものである。

将基面貴巳先生の「Debating Japanese Patriotism in the Global Context: Alfred Ligneul and the Controversy on *The Clash between Education and Religion*」は井上哲次郎の「教育と宗教の衝突」に対するパリ外国宣教会のリギョール神父の観点を紹介し、この有名な論争を初めてグローバルな文脈に位置付けた。マードック大学のサンドラ・ウィルソン先生の「What Difference Did the Second World War Make to Japanese Nationalism?」は第二次世界大戦が日本のナショナリズムの発展にいかなる影響を与えたのかを論じ、オタゴ大学のヴァネッサ・ワード先生は「Taking the Ordinary People Seriously: the Institute for the Science of Thought and Democracy in Early Postwar Japan」において「思想の科学」の人々の思想と活動を紹介している。

シドニー大学のマッツ・カールソン先生の「The Noble Art of Procrastination: Writer's Block as a Motif in *Watakushi shosetsu*」は私小説に繰り返し現れる作家の創作困難の意義と様式を論じ、カンタベリー大学のスーザン・ブーレイ先生「Okinawa's Fictional Landscapes: A Reading of Medoruma Shun's *Suiteki* (Droplets)」は沖縄出身の芥川賞受賞作『水滴』における沖縄の空想された風景と戦争の記憶を考察する。豪州ウーロンゴン大学のヘレン・キルパトリック先生の「Animating the Animal in Post-3.11 for Young People: *Kibō no Bokujō* (The Farm of Hope)」は、東日本大震災後の少年読者を相手にする『希望の牧場』の動物描写のものが現実世界の風刺を分析している。

オークランド大学のエメラルド・キング先生の「“And I'll Form the Head!” Cosplay as an Adaptive Process」は、コスプレの定義、文化的意義、「文化翻訳」としての意味を熱く説明する。ワイカト大学のアリステア・スウェール先生の「Shinkai Makoto—the “New Miyazaki”

or a New Voice in Cinematic Anime?」は、アニメ作家新海誠の作品を取り上げ、アニメに反映された日本の政治と社会を論じ、大衆文化の発展をいち早くキャッチする鋭敏さを示している。オタゴ大学の柴田優呼先生の「開放後中国と戦後日本の、甘美でほろ苦い追憶——『非誠勿擾』と「知床旅情」——」は、中国人の日本旅行ブームの火付け役ともなった有名な映画『非誠勿擾』と日本の有名な歌に通じる社会的背景の異同を分析する。

日文研からも五人が発表している。荒木浩先生の「〈妊娠小説〉としてのブッダ伝——日本古典文学のひながたをさぐる」は東南アジア伝来のブッダの子供誕生の諸説と光源氏の息子柏木の誕生とを比較し、『源氏物語』がブッダ伝から受けた影響の可能性に言及している。石上阿希先生の「出版物にみる知識の収集と展開——絵入百科事典を中心に——」は江戸期の『訓蒙図彙』に現れた万国人物の表象と変遷を取り上げ、当時の社会のもつ海外知識の一端を示す。ジョン・ブリーン先生の「Ise's Modern Transformations or the Pleasures of Pilgrimage in 19th Century Japan」は伊勢神宮の俗的空間と聖的空間の形成の過程を比較研究する。北浦寛之先生の「草創期の日本のテレビ・ドラマ制作・映画との比較の中で」は初期のテレビ・ドラマ『私は貝になりたい』の構造、モチーフ、製作を論じる。

井上章一先生の「現代風俗に見るキリスト教」は、女性ファッション雑誌の読者モデルの出身校の大半がミッション・スクールであること、日本の偽教会で偽牧師の前で愛を誓い、結婚式を挙げる日常的現象を例に、日本社会がいかにキリスト教の外的イメージに憧れているのかを考察するものである。関西大学で教えるニュージールランド人教員アレキサンダー・ベネット先生は、自分も留学生だった時に、アルバイトとして偽牧師をしたことが何回もあると告白して、場内を賑わわせた。井上先生は大方の人に見過ごされがちな社会現象を見つめ直す機会を

提供してくれているが、その主旨が誤解されて、女性を性的対象として扱っているというコメントがあった。異文化理解は、誤解が伴われるものと改めて思わせられる。

今回のシンポジウムは、日文研が南太平洋の日本研究と協力し、それを支援する姿勢が明確に打ち出されて、南太平洋の諸大学の日本研究の展開に非常に意義のあることである。そればかりではなく、ペンシルヴァニア大学とオタゴ大学がこれから展開する太平洋文化についての交流のきっかけをつくることにもなっている。海外シンポジウムの開催は、広い波及効果があり、「日本研究」だけではなく、グローバルな文化研究にも役に立っているようである。本シンポジウムを支援してくださったオタゴ大学と駐ニュージーランド日本大使館にも深く感謝を申し上げる。

学会発表が終わって長雨が止み、晴れ渡った夜空を仰ぎ見ながら、参加者たちに南十字星の探し方を示すことができたことは、私の大きな自慢だった。

（国際日本文化研究センター准教授）

日文研データベースの将来を考える

―「平成二八年度『デジタル技術を用いた支援ツールの活用による研究成果の可視化』に関する研究会」に参加して―

光 平 有 希

はじめに

「平成二八年度『デジタル技術を用いた支援ツールの活用による研究成果の可視化』に関する研究会」が一〇月一七日に江戸東京博物館で開催された。これは人間文化研究機構が進める「在外資料調査・研究・活用」事業のうち、「ヨーロッパにおける一九世紀日本関連在外資料調査研究・活用―日本文化発信にむけた国際連携のモデル構築―」研究班の「活用」部分の事業の一環である。同研究会では、この班の中心となる日高薫氏（国立歴史民俗博物館・教授）、原田泰氏（公立はこだて未来大学・教授）、鈴木卓治氏（国立歴史民俗博物館・助教）により、プロジェクトの成果としての研究情報発信や共有化、特に展示を通じた活用に関して、デジタル技術を援用した支援ツール開発の実例が報告された。なお、日文研は全体の事業に関わる四つの研究班のひとつとして責任を担っており、本稿では、研究会での報告内容をまとめた上で、日文研所蔵史料の可視化にはどのような手掛かりを見いだすことができるのかについても、少し考察してみたいと思う。

1. 研究会の報告

「ヨーロッパにおける一九世紀日本関連在外資料調査研究・活用―日本文化発信にむけた国際連携のモデル構築―」研究班は、六年間に亘るシーボルト関係資料の総合的な調査によって得られた成果を広く発信するため、二〇一六年七月より国立歴史民俗博物館（以下、歴博と表記する）など五つの博物館において、「よみがえれ！シーボルトの日本博物館」という企画展（巡回展）を開催している。同研究班では企画展開催にあたり、これまで収集・調査を行った八千点以上に及ぶ膨大な情報量の研究成果を可視化するため、映像やプロジェクトションマッピング、デジタルアーカイブなどの支援ツールを用いた成果の効果的な発信方法について、長きに亘り検討が行われてきた。

一般的なデジタルアーカイブは、資料を一点一点詳細に見せることに特化した提示を行っている。そのため、複数の資料を見比べることは難しく、時代の遷移や地域、材質の違いによる特徴など、複数の資料の関係性を読み解きにくいという難点が見受けられる。また、博物館展示では、各資料が展示の意図を伝えるために工夫して配置されるのに対し、デジタルアーカイブでは各資料が種別ごとに整理されているとは言え、全ての資料がリスト状に表示される。それゆえ、デジタルアーカイブを博物館展示で利用する場合は、利用者に専門家の意図や展示の意図が伝わるよう工夫した資料の表示が求められている。

このことを受け、同研究班では、博物資料の関係性を視覚化し、歴史研究者の視点や展示の意図をデジタルアーカイブの利用者に体験的に伝えることを目的として定めた。そして、はこだて未来大学の原田泰氏、及び同大学の大学院生と連携して、複数資料の関係性を視覚的、動的に表現し、展示空間においても一般のパソコンでも利用可能なデジタルアーカイブビュアー

の構築を行った。その構築過程においてまず行われたのが、「歴史研究者の資料の見方に関する調査」であった。はこだて未来大学の学生が、展示プロジェクトを進めている歴史研究者五名を対象に半構造化インタビューを行った結果、観察する資料種別が異なっても共通する資料の見方として「新たな資料を分析する際は形状や模様、技法などが似ている資料をみつけて比較する」、「資料の全体像からある部分へ注目する粒度を変えながら観察する」という特徴が抽出された。そして、これらの特徴を視野に入れつつデジタルアーカイブビューアの構築が行われることとなった。

さて、デジタルアーカイブビューアのもととなった、ミュンヘン五大陸博物館所蔵シーボルト・コレクションのデジタルアーカイブ（同研究班が作成）では、市販のFileMakerが使用されている。そして、それを発展させたデジタルアーカイブビューアは、展示会場内でのタブレットによる利用を想定し、HTML、JavaScript、MySQLをベースにwebアプリとして開発されている。また、同ビューアには、利用者が専門家に近い視点から資料観察を体験できるように、資料について図解表現を用いたレイアウトに並び替える「資料構造の解体・再構築」、そして、類似の特徴を持つ資料を集めて表示する「資料の解散・集合」という二種類の資料提示方法を設計した点に特徴がみられる。

具体的には、「資料構造の解体・再構築」では、利用者は自身の興味に沿って画面上の資料レイアウトを変更することができる。例えば、各資料種別に並び替える場合には、企画展で扱う資料が何を中心に集められたのかを判別できるよう、種別ごとの資料点数の割合が視覚的に表示される。さらに、年代順に並び替える場合には、西暦が書かれた年表に資料がマッピングされるといふシステムになっている。この提示方法は、資料の関係性を視覚化し、分かりやす

く提示するだけでなく、利用者自身が興味・関心に沿って見え方の構造を変化させることで、資料間の関係性の理解・解釈を促すことを意図している。一方、「資料の集合・解散」では、利用者は資料が持つある属性（年代、地域、材質など）と共通する属性を持つ資料だけを集めて表示することができる。これにより、利用者は気になったサムネイル画像やキーワードを選択していくだけで、資料間の共通性を発見できるほか、より専門的な関連を持った資料を閲覧していくことが可能となっている。

2. 日文研での応用

歴博は、「資源」「研究」「展示」という三つの要素を有機的に連鎖させて、積極的に「公開・共有」を進めることにより、博物館研究統合に努めているという。その中で、今回は、既存のデジタルアーカイブを企画展において発展的に活用することによって、研究内容を広く発信することに成功していた。ただし、これは研究成果を「展示」という形で発信する場所を常に有する歴博だからその特徴でもあり、そのままの形で日文研に応用することは困難である。しかしながら、架空の企画展の場合が日文研所蔵資料の各データベース上であると仮定した場合、研究部と情報課との緊密なさらなる連携のもとで、各データベースの特質や利用者に合わせて、分類や表記の再考、また、利用者が求めている資料に素早く、なおかつ広い情報を付加させながら辿り着く道筋の検討など、新たな検索システムの立案・運用・活用事業の展開も可能なのではないかと考えられる。

私は、日本関係欧文図書（外書）を中心とした貴重書データベース、そして野間文庫データベースに関する業務に従事しているが、所蔵資料の認知及びそれらの新規資料利用者の確保に

は非常に長い時間を要するものと日々実感している。貴重な所蔵資料があり、それを公開するためにデータベースを構築する。しかし、それだけでは開かれたデータベースとしての役割は果たせていない。今回の研究会を通してその先にある閲覧者（研究者・一般の人）が「利用する」という視点をも常に意識していなければ、せっかく構築したデータベースの価値や意義まで衰退してしまう可能性が大いにあるということを改めて痛感した。

また今回、研究会で報告されたデジタルアーカイブビューアーでは、全体を通じてアニメーションを利用した画面遷移を行っている点も特徴的であった。日文研のデータベースでも利用者が自ら探求してみようとする利用行動を促進するためには、アニメーションによる演出によって、資料を検索・観察していく経験を魅力化し、コンテンツへの積極的な関わりを促すということも必要となってくるのではないかと考える。例えば、貴重書データベースで考えるならば、データベース上において、利用者がある一つの著作を検索した際、それと同時に、その著作に類似した内容や言語の著作、あるいは検索された著作の別刊本などをシステムが予測して、その著作のタイトルページが流動的に画面の上下で提示され、利用者に今後読むべき著作として提案してくれたなら、私も一利用者としてとても嬉しい。

さらに、前述した「研究者の視点を反映する」という観点も日文研のデータベース、あるいはその附属 Web サイト構築の際にも有効に応用できるのではないだろうか。資料を「提示する」「検索できる」だけではなく、その資料を扱う専門家の見方も投影することによって、各資料のみならず該当研究自体の魅力の発信にも繋がる。貴重書データベースの場合、各著作の全ページを閲覧・ダウンロードできる既存データベースの導線として、今後作成予定の附属 Web サイトでは、データベース掲載全著作の解説を加えるほか、複数著作に描かれている同

一テーマの挿絵を比較分析してその特徴や面白さを伝えたり、各著作の時代背景、あるいは装丁や紙に関する知識などを得られるコンテンツを充実させることも一つの手だと思われる。さらに研究会で得た知見の中で、今回の研究班のように主要機関を基盤としながら他大学と連携することを模索するということも非常に興味深い。例えば京都内の他大学と連携することにより、広い視野のもとでのシステム構築が進むと同時に、研究公開の場におけるデジタル技術の応用を巡って、地域への貢献、また新しい教育現場形成への貢献も模索できるであろう。

この度の研究会参加は、そこで得た知見や技術を日文研という機関の性格に応じて取り入れることにより、既存データベースの可能性がさらに広がってくるかもしれない、そんな期待に胸を弾ませた時間でもあった。最後になるが、会場を提供してくださった江戸東京博物館に感謝の意を述べたい。

（国際日本文化研究センタープロジェクト研究員）

センター通信

クリーニング・オールナイト

―寄贈レコードのその後のお話―

西川 真樹子

私が覚えている、人生で初めて自分で聞いたレコードは、小学館の雑誌「小学一年生」の付録についていたソノシートです。盤面に針をそっと置いて、おもちゃのようなポータブル・プレーヤーから聞こえてくるソノシートの音に、わくわくしながら耳をそばだてていた記憶は今でも残っています。「ソノシート? ああ、あれね」と思われた方は三十路の山を（とつくに）越えられている方が多いでしょう。ご存知ない方にご説明すると、ソノシートとは下敷きのような素材で

できた赤や青のぺらぺらのレコードです。音質は良くないのですが、とにかく安価で、雑誌の付録や販促グッズとして、一九六〇年代から八〇年代の間に出版されたそうです。

そういったソノシートや実家にあったレコードも、気がつくといつの間にか消えていて、そこから私がレコードを手にする機会はほぼなくなっていました。それが突然、この四月から始終レコードの先行きを思案する立場になりました。ここでは『日文研』五五号（二〇一五年九月）に真鍋昌賢先生が執筆された「浪曲研究をはじめた頃 森川司さんの思い出とともに」からの勝手に続編企画として、ご寄贈いただいたレコードのその後についてお話ししたいと思います。

さて、前置きが長くなりましたが、私は今年の四月に京都大学より日文研資料課に異動してまいりました。初めての出



ビフォー：SPレコードが入っていた書類用スタンドボックス

向、初めての目録業務で期待に胸を膨らませた私を待っていたのは、約一万枚のレコードのクリーニングです。二〇一四年三月に真鍋先生を経由して寄贈された森川司さんの一万枚のレコードは、二〇一五年に図書館システムにデータ登録されたものの、現物そのものは寄贈された当時とほぼ変わらないう状態でした。つまり、三〇枚程のレコードが縦に入った紙製の書類用スタンドボックスが、書庫に三七〇個ぎっしりと並んでいる状態だったのです。

一方、ご寄贈いただいたレコードの音源をアーカイブするために、情報課でレコードのデジタル録音の話も進んでいました。レコードを聞かれたご経験のある方は、レコードの「チリチリ」といった雑音を記憶されていると思いますが、あの音は盤面の傷や静電気のコリによることが多く、できるだけクリアな音を録音するためには、これらを取り除かなければいけません。日文研でのレコード録音は、盤面をレーザで読み取る方法で行うため、レコードの盤面を傷つけることはないのですが、通常よりもさらに盤面がきれいな状態であることが求められます。そこで、着任早々の私に突きつけられたのは、レコード一万枚のクリーニングとそれらを保存に耐え得る状態にして書庫に再収蔵することでした。

ここで少し補足しますと、日文研に寄贈されたレコードのほとんどはSPレコードです。今、レコードブームの再燃で、専門店以外でも、お洒落なカフェや本屋さんでレコードを見かける機会があるかと思いますが、その多くはLPレコードで、SPレコードの改良後継版とも言えます。大正・昭和初期に主要な音楽メディアのひとつだったSPレコードは、一九五一年にLPレコードが日本で初めて輸入販売されると、徐々に衰退し、一九六三年に国内での生産を終了しています。SPレコードはLPレコードと比べて録音時間が短く、割れやすく、反りやすいといった特徴があり、同じレコードでも保存方法を変える必要があります。

さて、お話を戻してレコードクリーニングと収蔵の続きです。クリーニングは盤面に専用の洗浄液を垂らし、ブラシで磨いた後、レコードクリーナー（ターンテーブルにバキュームがついたような機械）で汚れた液を吸い取り、クロスで拭いて一日乾燥させます。その後、一枚ずつ中性紙封筒に入れ、一〇枚から一五枚程度を、特注の中性紙箱に入れて寝かせて保存します。LPレコードは同じクリーニングの後、プラスチック製の袋と中厚の紙製ジャケットに入れ、一枚ずつ立てて保存します。これらの保存方法は特任助教の古川綾子先生



アフター：クリーニング後のSPレコードが収められた保存箱

にご相談にのっていただきました。作業自体は業者さんをお願いして、一日約八〇枚のクリーニング作業で、五月から始めて一月末に完了しました。一方、録音の方は一月末現在で九〇〇枚程度が完了しています。録音といっても、盤面の音の状態をチェックするために一枚ずつ聞きながら行っていますので、とても時間のかかる作業になります。その他にもレーベルの撮影も情報課で並行して行っており、こちらは年度内に終了の予定です。

ここまですが寄贈レコードの現状のお話です。クリーニング作業は終了しましたが、アーカイブの完成まではまだ数年かかる見込みです。著作権の問題もあり、完成後すぐの公開は難しいかもしれませんが、いつの日かアーカイブが公開され

て、皆さんにご利用いただける日が来ましたら、完成に至るまでの工程やそれに関わった多くの人間の存在に思いを馳せていただけますと、望外の喜びです。そのときは、きっと日文研の職員がこのお話の後日談をこちらで書いてくださるかと思います。つまり、これは未来の「日文研」への私からの宿題なのです。

(一) 田口史人(著)『レコードと暮らし』夏葉社 二〇一五年 一七九頁

(二) 映画保存協会「レコードの適切な取扱いと保存方法」
二〇一六年二月一日

<http://filmpres.org/preservation/library01/>

(国際日本文化研究センター資料課目録情報係)

共同研究

(二〇一六年四月一日～九月三〇日)

戦後日本文化再考

(研究代表者 坪井秀人、幹事 磯前順一)

〔共同研究者名〕

浅野麗、石川巧、岩崎稔、大原祐治、岡田秀則、辛島理人、狩俣真奈、川口隆行、北中淳子、北原恵、木村朗子、紅野謙介、高榮蘭、五味渕典嗣、斉藤綾子、佐藤泉、尹芷汐、塩野加織、島村輝、申知瑛、菅野優香、鈴木勝雄、張政傑、長志珠絵、十重田裕一、鳥羽耕史、戸邊秀明、成田龍一、野上元、朴貞蘭、橋本あゆみ、福岡良明、松原洋子、水川敬章、光石亜由美、美馬達哉、村上(伊波)陽子、李承俊、鷺谷花、渡辺直紀、渡邊英理、沈熙燦、郭南燕、北浦寛之、石川肇、王莞喆、栄元、増田斎、田村美由紀、杉田智美

〔海外共同研究員名〕

酒井直樹、五十嵐恵邦、キャロル・グラック

〔研究発表〕

〈第七回研究会〉

二〇一六年四月一六日

個人発表「占領期」

尹 芷汐 「戦後日中間の知識人ネットワークにおける『日

本文学』の意味」

番匠健一 「戦後北海道における『植民』と『開拓』——高岡

熊雄の戦後」

ニコラス・ランブレクト 「引揚げ文学からみたバンドン十

原則…安部公房の場合」

研究会ウェブサイトのデモンストレーション

二〇一六年四月一七日

パネル発表「戦後とメディア／占領期の地方雑誌」

石川 巧「戦争末期の外地における言論状況——雑誌『月刊毎日』を読む」

森岡卓司「雑誌『労農』と森英介——地方文化運動の行方」
天野知幸「GHQ占領下の引揚雑誌における〈越境〉の記録と記憶——雑誌『みなと』を中心に」

ディスカッサント 大原祐治

全体討論

〈第八回研究会〉

二〇一六年六月一八日

山本昭宏 論題「酒井直樹『レイシズム・スタディーズへの視座』を読む」

小田龍哉 論題「酒井直樹『トランス・パシフィック・スタディと米日の共犯』論評」

全体討議

二〇一六年六月一九日

基調講演

酒井直樹「戦後日本社会と人種主義」

ディスカッション

ディスカッサント 磯前順一、坪井秀人

全体討議

〈第九回研究会〉

二〇一六年八月二〇日

「記録をつなぐ、記憶をつなぐ——福島県富岡町の試み」
五味渕典嗣「コーディネーターによる趣旨説明」

報告 三瓶秀文、門馬健

コメント 木村朗子、高榮蘭

総合討議

二〇一六年八月二一日

「帝国と民族のはざままで——日本敗戦後の朝鮮人・台湾人とその政治・文化運動」

渡辺直紀 パネル趣旨説明

申 知瑛「徴用朝鮮人・台湾人の『戦後』とインドネシア」

渡辺直紀「『北の詩人』再読——林和と朝鮮文学」

廣瀬陽一「日本論・日本人論の流行と金達寿『日本の中の朝鮮文化』」

コメント 波田野節子、金友子

総合討議

浪花節の生成と展開についての学際的研究

〔研究代表者 真鍋昌賢、幹事 細川周平〕

〔共同研究者名〕

芦川淳平、上田学、北川純子、薦田治子、諏訪淳一郎、時田アリソン、馬場美佳、兵藤裕己、細田明宏、森谷裕美子、早稲田みな子、渡瀬淳子、延宏真治、古川綾子

〔海外共同研究員名〕

瀬戸智子、朴英山

〔研究発表〕

二〇一六年五月二八日

〈第一回研究会〉

真鍋昌賢「共同研究会の主旨と森川コレクションの概要について」

細田明宏「語り芸あるいは寄席芸としての浪花節―浄瑠璃、講談、浪花節の『壺坂靈驗記』から」

二〇一六年五月二九日

今後の予定についての相談

〈第二回研究会〉

二〇一六年八月二九日

日文研所蔵浪曲レコードの見学

早稲田みな子「ハワイ・カリフォルニアの日系社会と浪花節」

節

二〇一六年八月三〇日

芦川淳平「ホワイトハウスの浪曲師―奈良丸北米紀行の足跡―」

〈第三回研究会〉

二〇一六年九月二二日

北川純子「明治〜大正期の『女流』浪花節語り」

時田アリソン「浪花節の口頭性…『左甚五郎』シリーズを中心に」

二〇一六年九月二三日

薦田治子「浪花節と薩摩琵琶の音楽構造比較試論」

戦争と鎮魂

〔研究代表者 牛村 圭、幹事 ション・ブリーン〕

〔共同研究者名〕

岩崎徹、大東和重、加藤めぐみ、川村覚文、川本玲子、栗原俊雄、古田島洋介、小堀馨子、佐伯順子、谷口幸代、竹村民郎、等松春夫、永井久美子、西原大輔、眞嶋亜有、竹ノ内（吉井）文美、吉田（古川）優貴、末本文美士、堀ま

どか、朴美貞、平松隆円、今泉宜子、稲賀繁美、倉本一宏、松田利彦、劉建輝、磯前順一、郭南燕、西田彰一、南直子

〔海外共同研究員名〕

徐載坤、ケビン・ドーク、エヤル・ベンアリ、金志映

〔研究発表〕

〈第一回研究会〉

二〇一六年八月一三日

牛村 圭「三年目の共同研究会展望など」

西田彰一「寛克彦の思想とその影響について」

栗原俊雄「『戦後補償裁判』(NHK出版新書、二〇一六年

六月)を読む」

発話 牛村 圭

全員討論

〈国際共同研究会〉

画像資料(絵葉書・地図・旅行案内・写真等)による帝国領

域内文化の再検討

(研究代表者 劉 建輝、幹事 北浦寛之)

(共同研究者名)

安藤潤一郎、井村哲郎、岡本貴久子、上垣外憲一、岸陽子、小林茂、小林善帆、呉孟晋、白幡洋三郎、姜克実、鈴木貞美、戦暁梅、単援朝、塚瀬進、鳥谷まゆみ、根川幸男、松宮貴之、森田憲司、李相哲、劉岸偉、仲万美子、井上章一、稲賀繁美、伊東貴之、松田利彦、森洋久、陳其松、石川肇

〔海外共同研究員名〕

王中忱、孫江、徐興慶

〔研究発表〕

〈第五回研究会〉

二〇一六年八月五日

松宮貴之「中国の政治家と書の分析―洋務派から変法派ま

で」

鄭 在貞「帝国日本の植民地支配と朝鮮鉄道」

二〇一六年八月六日

仲万美子「モダン都市の娯楽空間への誘い仕掛けについ

て…大連を映し出す画像資料からの読み解きを通して」

説話文学と歴史史料の間に

(研究代表者 倉本一宏、幹事 榎本 渉)

〔共同研究者名〕

東真江、石川久美子、上野勝之、内田滯子、大橋直義、尾崎勇、追塩千尋、加藤友康、川上知里、木下華子、小峯和明、佐野愛子、佐藤信、関幸彦、五月女肇志、曾根正人、多田伊織、蔦尾和宏、中村康夫、野上潤一、野本東生、樋口大祐、藤本孝一、古橋信孝、保立道久、前田雅之、松蘭齊、三舟隆之、山下克明、横田隆志、白雲飛、荒木浩、井上章一、呉座勇一、中町美香子、谷口雄太、龔婷

〔海外共同研究員名〕

グエン・ティ・オワイン、宋浣範、劉曉峰、魯成煥、グエン・ヴー・クイン・ニュー

〔研究発表〕

〈第一回研究会〉

二〇一六年六月四日

追塩千尋「武内宿禰伝承の展開」『古今著聞集』武内宿禰

説話の意義とその背景」

古橋信孝「大和物語の歴史と文学」

二〇一六年六月五日

井上章一「百合若大臣の読み説き」

論集打ち合わせ

〈第二回研究会〉

二〇一六年七月九日

三舟隆之「・『東大寺諷誦文稿』・『日本霊異記』・『日本感霊録』の成立とその性格」

多田伊織「言葉と信仰 『日本霊異記』周辺の言語環境」

二〇一六年七月一〇日

龔 婷「京洛の境界線―文学・古記録における平安京の『内と外』の認識変化について」

倉本一宏「『ユノ話ハ蓋シ小右記ニ出シナラン』考」

〈第三回研究会〉

二〇一六年九月一〇日

東 真江「説話と考古学」

仁藤敦史「『日本霊異記』にみる他界観―黄泉の国から地

獄への転換―」

二〇一六年九月一日

（鼎談『日文研問題』をめぐる）

加藤友康「古事談の情報源―古記録が筆録した情報と『言談』への変容の検討を通して考える―」

グエン・ティ・オワイン「日本とベトナムの説話における歴史人物のイメージをめぐる―『日本霊異記』と

『今昔物語集』を中心に」

3・11以後のディスクリール／『日本文化』

〔研究代表者〕 ミツヨ・ワダ・マルシアーノ、幹事 坪井秀人

〔共同研究者名〕

石田美紀、久保豊、谷川建司、木村朗子、川口隆行、クリ
ステイーナ・岩田ワイケナント、清水晶子、高橋準、菅野
優香、出口康夫、水谷雅彦、一ノ瀬正樹、近森高明、西村
大志、松浦雄介、アンニャ・ホップ、安本真也、須藤遙
子、馬然、木下千花、大塚英志、北浦寛之、長門洋平

〔海外共同研究員名〕

王向華、金普慶

〔研究発表〕

二〇一六年九月二四日

自己紹介＋研究発表計画報告

二〇一六年九月二五日

自己紹介＋研究発表計画報告続き

久保 豊「二人の息子、二人の母」

石田実紀「マンガ・アニメにおける原発事故と放射性物質

の表象―『Coppelion』と『美味しんぼ』を中心に」

日本の舞台芸術における身体 ―死と生、人形と人工体

〔研究代表者〕 ボナベントウーラ・ルペルティ、幹事 細川
周平

〔共同研究者名〕

赤間亮、板谷徹、井上理恵、岩井眞實、梅山いつき、カ
ティア・チェントンツェ、菊地浩平、桜井圭介、佐藤恵
里、武井協三、竹本幹夫、土田牧子、中嶋謙昌、深澤昌
夫、藤井慎太郎、森下隆、山田和人、滝澤修身、橋本裕
之、李応寿

〔研究発表〕

〈第五回研究会〉

二〇一六年五月二一日

滝澤修身「宣教師の見た日本の古典芸能」

岩井眞實「歌舞伎の場面転換の方法について」

井上理恵「川上音二郎と貞奴の身体表現」

ボナベントウーラ・ルペルティ「舞踊の身体について」

オーブンデイスカッション

〈第六回研究会〉

二〇一六年七月一六日

梅山いつき「平田オリザの俳優論―ロボット演劇プロジェ

クトを中心に」

カティア・チェントンツェ「土方巽の肉体論―死体から出
発すること」

森下 隆「肉体の叛乱から衰弱体へ―土方舞踏の転換期」
桜井圭介「小劇場演劇とコンテンポラリー・ダンスにみる

日本的(?) 現在形(?) の身体」

オープンディスカッション

比較のなかの東アジアの王権論と秩序構想―王朝・帝国・国
家、または、思想・宗教・儀礼―

(研究代表者 伊東貴之、幹事 倉本一宏)

〔共同研究者名〕

青木隆、新井菜穂子、井上厚史、恩田裕正、垣内景子、橘
川智昭、権純哲、小島毅、関智英、末木文美士、銭国紅、
竹村英二、竹村民郎、田尻祐一郎、土田健次郎、永富青
地、西澤治彦、長谷部英一、林文孝、松下道信、水口拓
寿、横手裕、李梁、吾妻重二、新田元規、石井剛、伊藤
聡、井ノ口哲也、内山直樹、遠藤基郎、大久保良峻、荻部
直、黒岩高、岸本美緒、児島恭子、近藤成一、佐々木愛、
杉山清彦、高柳信夫、葭森健介、保立道久、李曉東、本

間次彦、松野敏之、石川洋、澤井啓一、渡邊義浩、前田
勉、渡辺美季、平野千果子、中純夫、古勝隆一、茂木敏
夫、井上章一、瀧井一博、ジョン・ブリーン、松田利彦、
劉建輝、榎本渉、フレデリック・クレインス、マルクス・
リュッターマン、佐野真由子、山村奨

〔海外共同研究員名〕

張啓雄、葛兆光、手島崇裕、ベンジャミン・A・エルマン

〔研究発表〕

〈第一回研究会〉

二〇一六年五月二八日

伊東貴之「共同研究の趣旨説明」

〈第二回研究会〉

二〇一六年七月二三日

伊東貴之「伝統中国をどう捉えるか?―伝統中国の国家・

社会論のための一考察」

井ノ口哲也「班固『兩都賦』と張衡『二京賦』―後漢知識

人の洛陽(雒邑)観 初探―」

小島 毅「周公はなぜ偉大なのか―経学に見る儒教の王権

理論―」

〈第三回研究会〉

二〇一六年九月二四日

関 智英 『東洋Ⅱ王道』『西洋Ⅱ霸道』の起源―王正廷・

殷汝耕・孫文

古勝隆一 「衰世の皇帝菩薩―南朝陳における王権と仏教」

内山直樹 「逐鹿と王命―前漢期王権論の展開」

万国博覧会と人間の歴史

(研究代表者 佐野真由子、幹事 井上章二)

〔共同研究者名〕

石川敦子、市川文彦、岩田泰、鵜飼敦子、江原規由、神田

孝治、澤田裕二、寺本敬子、中牧弘允、芳賀徹、増山一

成、武藤秀太郎、武藤夕佳里、橋爪紳也、林洋子、稲賀繁

美、瀧井一博、劉建輝

〔海外共同研究員名〕

青木信夫、ウィーベ・カウテルト、シビル・ギルモンド、

徐蘇斌

〔研究発表〕

〈第一回研究会〉

二〇一六年五月一四日

井上 潤 【書評と展望①】

坂口 康 【書評と展望②】

二〇一六年五月一五日

増山一成 「今後の研究展望――一九四〇年日本万博をめぐ

る人・モノ・社会」

次期論集計画について、相談、全員討論

〈第二回研究会〉

二〇一六年七月三〇日

杳名貴彦 【書評と展望③】

木下直之 【書評と展望④】

二〇一六年七月三一日

神田孝治 「今後の研究展望―博覧会とツーリズム」

次期論集に向けて、全員討論

多文化間交渉における「あいだ」の研究

(研究代表者 稲賀繁美、幹事 榎本 渉)

〔共同研究者名〕

新井菜穂子、鵜戸聡、江口久美、大西宏志、岡本光博、小

川さやか、隠岐さや香、小倉紀蔵、金子務、鞍田崇、クリ

ストフ・マルケ、近藤高弘、申昌浩、鈴木洋仁、全美星、

莊千慧、滝澤修身、武内恵美子、竹村民郎、多田伊織、千

葉慶、テレングト・アイトル、戸矢理衣奈、中村和恵、西原大輔、二村淳子、朴美貞、橋本順光、範麗雅、平松秀樹、平芳幸浩、藤原貞朗、ヘレナ・チャプコヴァー、堀まどか、松嶋健、三原芳秋、マシュー・ラーキン、山本麻友美、今泉宜子、木村直恵、林洋子、郭南燕、フレデリック・クレインス、森洋久、宮崎康子、李応寿、石川肇、杉田智美、デイビット・W・ジョンソン、セシル・ラリ、長門洋平、九里文子、李ユンヒ、春藤献一、片岡真伊

〔海外共同研究員名〕

デンニツァ・ガブラコヴァ、近藤貴子、ミツヨ・デルクール・イトナガ

〔研究発表〕

〈第一回研究会〉

二〇一六年四月二七日

稲賀繁美 主旨説明

鈴木洋仁「ネット時代の日本の海賊―2ちゃんねるからニ

ニコ動画まで」

多田伊織 コメンテーター

江口久美「海賊党の液体民主主義について」

宮崎康子「開かれた経済と海賊行為」

橋本順光「海賊、海賊行為と蛸―触手の怪物から八面六臂のエイリアンへ？」

二〇一六年四月二八日

フレデリック・クレインス「略奪品か戦利品か―一六一五年のサント・アントニオ号拿捕事件と幕府の対応」

小川さやか「〈借り〉をまわすシステム―タンザニアにおける携帯を通じた送金システムを事例に」

片岡真伊「マンガ翻訳の海賊たち―スキャンレーションにおける航海術をめぐる―」

鞍田 崇「つくることのゆくえ」

範 麗雅「中国人外交官と一九三五年の『ロンドンにおける中国芸術国際展覧会』…提案から実現まで」

近藤貴子「アヴァンギャルドイストとしての自己定位の探究―工藤哲巳の海賊的考察」

榎本 渉「悪石島の寄船大明神とその周辺」

デイスカッション

パトリック・フロレス＋稲賀繁美

ミカエル・リュケン＋稲賀繁美

タイモン・スクリーチ＋稲賀繁美

カフェスタイルフリーデイスカッション 『海賊史観』 関

係研究成果の報告と自由討論」

金杭十・ペドロ・エルベール十三原芳秋「海賊史観による戦後民主主義再考」

〈第二回研究会〉

二〇一六年五月二八日

稲賀繁美「日本美学における『あいだ』概念についての考察」

総合討論

二〇一六年五月二九日

「あいだ」研究会の運営に関する自由討論・計画立案
「うつし」と「うつわ」プロジェクトに関する説明と自由討論・計画立案

〈第三回研究会〉

二〇一六年七月三日

(所外開催)

多摩美術大学美術館B1多目的室

「鈴木大拙と松ヶ岡文庫」展見学

末木文美士「鈴木大拙の思想」

富澤かな『『精神性』『靈性』spiritualityをめぐる東西のへあいだ』

二〇一六年七月四日

李應壽「村山知義の『故郷物語』と転向」
討論

〈第四回研究会〉

二〇一六年七月三一日

稲賀繁美「左右の問題・渦巻きの疑問」

カフェセッションー自由討論

黒田玲子「右と左ーキラリティーを巡って…物理学から生物学へ」

質疑応答

二〇一六年八月一日

金子 努「渦巻きと螺旋についての科学史的・理論的基礎」
質疑応答

〈第五回研究会〉

二〇一六年八月二九日

稲賀繁美「『中動態』をめぐる問題構成」

森田亜紀「中動態とその射程」

三木順子「存在と現象の『あいだ』ーH・G・ガーダマー

のÜbergang (移行) 概念を手掛かりに」

多田伊織「Sanskritの動詞活用におけるVoice (態)

Ātmanepada (Middle or Reflexive) に ついて

二〇一六年八月三〇日

アグネシカ・コズィラ「西田幾多郎の芸術論における『あいだ』」

総合討論「中動態」と対人性―責任概念にむけて

〈第六回研究会〉

二〇一六年九月二六日

山崎佳代子「『ラウンド・テーブル』の起源」

申 昌浩「国境を越える歌曲 変貌するメッセージ」

二〇一六年九月二七日

地域文化代表と国際性・美術史学の現状を中心に

稲賀繁美「北京国際美術史学会参加者による報告＋総合討議」

差別から見た日本宗教史再考

(研究代表者 磯前順一、幹事 北浦寛之)

〔共同研究者名〕

吉村智博、佐藤弘夫、鈴木岩弓、小倉慈司、片岡耕平、鈴木英生、小田龍哉、川村覚文、山本昭宏、青野正明、沈熙燦、高柳健太郎、田辺明生、菊田真司、船田淳一、太田恭

治、浅居明彦、水内勇太、鍾以江、島蘭進、佐々田悠、寺戸淳子、金沢豊、西宮秀紀、舟橋健太、幡鎌一弘、鶴見晃、河井信吉、上村静、安部智海、竹本了悟、パトリシア・フィスター、マルクス・リュッターマン

〔海外共同研究員名〕

シュタイネック・智恵、シュタイネック・ラジ、ランジャナ・ムコパディヤヤー

〔研究発表〕

〈第一回研究会〉

磯前順一 イントロダクション

参加者自己紹介

小田龍哉「喜安朗による網野論の検討」

用語集企画説明

〈第二回研究会〉

二〇一六年七月九日

磯前順一 イントロダクション

磯前順一「公共宗教論の現在——『宗教概念』論から『他者のまなざし』論へ」

吉村智博「身分制研究史と賤民身分の具体像」
全体討議

〈国際共同研究〉

植民地帝国日本における知と権力

(研究代表者 松田利彦、幹事 瀧井一博)

〔共同研究者名〕

飯島渉、岡崎まゆみ、小野容照、加藤聖文、加藤道也、河原林直人、川瀬貴也、栗原純、愼蒼健、通堂あゆみ、アルノ・ナンタ、春山明哲、松田吉郎、宮崎聖子、やまだあつし、長沢一恵、李昇燁、中生勝美、山本浄邦(邦彦)、稲賀繁美、劉建輝

〔海外共同研究員名〕

陳延媛、李炯植、洪宗郁

〔研究発表〕

〈第一回研究会〉

二〇一六年四月一六日

松田利彦「最終年度を迎えるにあたって」

都留俊太郎「移入官僚と台湾警察の変容―内海忠司警察部

長期の台北州警察を中心に」

陳延媛「植民地の優生学―一九三〇年代台湾の精神病問

題を手がかりに」

洪宗郁「マルクス主義歴史学者・金洸鎮の生涯と学問」

韓国翰林大学校との共催シンポについての打ち合わせ

〈第二回研究会〉

二〇一六年六月三〇日

松田利彦「植民地朝鮮における公衆衛生学のある系譜」

ムン・ミヨンギ「植民地台湾の医療…統計と比較を中心に」

イ・スンイル「朝鮮総督府の植民地法制―民法を中心に」

チョ・ジョンウ「国家と市場の交錯…京城帝大商法研究の

ディレンマ」

長沢一恵「近代鉱業と植民地朝鮮社会―李鍾萬の大同鉱業

と雑誌『鉱業朝鮮』を中心に」

ラウンドテーブル討論

二〇一六年七月一日

やまだあつし「鹿児島高等農林学校からみた台湾・沖縄・

朝鮮」

春山明哲「日本における台湾史研究の一考察―戴國輝と

「知」の精神史の視点から―」

顔杳如「伝統と近代の交錯…『台湾歳時記』における植物

の知識」

小林善帆「帝国支配といけ花―植民地朝鮮・台湾の女学

校・高等女学校における相互参照を中心に」

総合討論

〈第三回研究会〉

二〇一六年九月一日

山本浄邦「尹雄烈と光州実業学校」

宮川卓也「『朝鮮民暦』に見る伝統知の近代的再編」

李 炯植「朝鮮近代史料研究会と戦後朝鮮近代史研究」

加藤道也「植民地官僚の統治認識―知と権力の観点から―」

李 昇燁「植民地統治と在野の知…『文化政治』期における

細井肇の活動」

本間千景「一九三〇年代朝鮮における農村振興運動と八尋

生男」

岡崎まゆみ「京城帝国大学の私法学」

明治日本の比較文明史的考察―その遺産の再考―

(研究代表者 瀧井一博、幹事 牛村 圭)

〔共同研究者名〕

五百旗頭薫、岩谷十郎、植村和秀、大川真、小川原正道、
勝部眞人、國分典子、塩出浩之、島田幸典、清水唯一朗、
谷川穰、永井史男、長尾龍一、中村尚史、福岡万里子、前
田勉、松田宏一郎、山田央子、岡本貴久子、浅見雅男、上

野景文、今野元、小林道彦、内藤一成、奈良岡聰智、楊際
開、杓居宏枝、松沢裕作、三谷博、大久保健晴、加藤雄
三、林洋子、ジョン・グリーン、佐野真由子、龔穎、石上
阿希、古川綾子

〔海外共同研究員名〕

ハラルド・フース、アリステア・スウェール

〔研究発表〕

〈第七回研究会〉

二〇一六年四月一日

石上阿希「春画を拒絶する、春画を見直す―明治から現代

まで」

大石 眞「明治憲法史研究の歩みと課題」

二〇一六年四月一日

今野 元「上杉愼吉とドイツ政治―吉野作造との対抗関係

に於いて」

龔 穎「漢詩のわかれ―ベルリン時代の井上哲次郎とそ

の詩友たち」

〈第八回研究会〉

二〇一六年六月三日

古川綾子「明治の関西演芸界にみる遊芸稼人と政治家の

ボーダーライン」

五百旗頭薫「明治日本の政治・文芸・歴史認識」

二〇一六年六月四日

浅見雅男「明治の皇族 永世皇族制の変遷」

楊 際開「吉田松陰の革命思想とその天下観―東アジアに

おける『鎖国』と『開国』という視点から」

〈第九回研究会〉

二〇一六年七月二十九日

西田彰一「『皇学会雑誌 神ながら』における明治維新論

の展開―一九三〇年代の筧克彦の思想と活動―」

平川祐弘「同時代を生きた内外の政治家の歴史観の比較は

いかにして可能か」

二〇一六年七月三〇日

末本文美士「国体と仏教」

小林道彦「近代日本の転換点―日露戦争と国内政治」

〈第二〇回研究会〉

二〇一六年九月九日

（所外開催 吉野作造記念館）

「吉野作造と明治文化研究」

（吉野作造二〇一三年度前期企画展「明治文化研究の奇人変

人たち―吉野作造・尾佐竹猛・宮武外骨―」の概要説
明、吉野作造記念館学芸員）

三谷 博「世界文脈における明治維新」

二〇一六年九月一〇日

谷川 穰「佐田介石について」

勝部真人「近代日本の農村経済組織化と村落―発展類型論

の視角から―」

二〇一六年九月一日

登米明治村見学

ガイド・登米明治村学芸員

マンガ・アニメで日本研究

（研究代表者 山田奨治、幹事 荒木 浩）

〔共同研究者名〕

飯倉義之、石田佐恵子、伊藤遊、岡本健、金水敏、高馬京

子、谷川建司、西村大志、山中千恵、山本冴里、横濱雄

二、安井眞奈美、北浦寛之、宮崎康子、小泉友則

〔研究発表〕

〈第一回研究会〉

二〇一六年七月三〇日

横濱雄二 作品検討『孤独のグルメ』
出版打合せ

日本語の起源はどのように論じられてきたか―日本言語学史
の光と影

〔研究代表者 長田俊樹、幹事 井上章一〕

〔共同研究者名〕

斎藤成也、安田敏朗、狩俣繁久、千田俊太郎、風間伸次
郎、永澤済、児玉望、菊澤律子、林範彦、アンナ・ブガエ
ワ、福井玲、伊藤英人、鈴木貞美、マーク・ハドソン、平
子達也、杉山豊

〔海外共同研究員名〕

トマ・ペレール、ジョン・ホイットマン、アレキサン
ダー・ヴォヴィン

〔研究発表〕

〈第一回研究会〉

二〇一六年四月二三日

安田敏朗「上田万年『日本語の本源』をめぐって」

二〇一六年四月二四日

井上章一「明治時代の日本語起源論―アーリヤ起源説をめ

ぐって」

斎藤成也「DNAからさぐる日本列島人」

〈第二回研究会〉

二〇一六年六月一八日

長田俊樹「はたして上田万年はどこまで西洋言語学を理解
していたのか」

鈴木貞美「日本近代の言文一致神話―言語学と国語学の問
題をめぐって」

二〇一六年六月一九日

風間伸次郎「言語類型論から見た日本語―松本克己『環日
本海仮説』の検討等を中心に―」

平子達也「日本祖語について」再読

〈第三回研究会〉

二〇一六年八月三〇日

長田俊樹「明治期の日本語系統論―日本の言葉はアリアン
言葉なり」

松森晶子「琉球祖語アクセント再建に向けて―今、何を記
述し、残しておくべきか」

五十嵐陽介「琉球語を排除した『日本語』という単系統群
は果たして成立するのか」

コメント 上野善道

二〇一六年八月三一日

児玉 望「核はなくなるのか」祖語アクセント再建仮説が

説明してきたこととしなかったこと」

狩俣繁久「日琉祖語はどのように語られてきたか」

トマ・ペレル「琉球諸語の下位分類」

コメント+ディスカッション 上野善道

〈第四回研究会〉

二〇一六年九月一七日

長田俊樹「戦後の日本語系統論—安田徳太郎のレプチャ語

起源説を中心に」

福井 玲「金沢庄三郎による日本語と韓国語の比較研究」

安田敏朗「小倉進平の朝鮮語研究」

二〇一六年九月一八日

伊藤英人「古代朝鮮半島諸言語に関する河野六郎説の整理」

杉山 豊「アクセント史資料としての伝統声楽——朝鮮語

の場合——」

投企する古典性—視覚／大衆／現代

（研究代表者 荒木 浩、幹事 稲賀繁美）

〔共同研究者名〕

飯倉洋一、伊藤慎吾、上野友愛、岡田圭介、河東仁、恋田

知子、河野貴美子、河野至恩、合山林太郎、齋藤真麻理、

竹村信治、中野貴文、中前正志、野網摩利子、三戸信恵、

箕浦尚美、山本陽子、渡部泰明、渡辺麻里子、マラル・

アンダソヴァ、石上阿希、呉座勇一、李愛淑、土田耕督、

徳永誓子、漆崎まり、ゴウランガ・チャラン・プラダン、

チャン・ティ・チュン・トアン、ガリア・トドロヴァ・ペ

トコヴァ

〔海外共同研究員名〕

楊曉捷、山藤夏郎、李愛淑

〔研究発表〕

二〇一六年五月一四日

李 愛淑「古典の翻訳—大衆性と視覚性を問う」

二〇一六年五月一五日

荒木 浩「投企する古典性—Projecting Classicism なるプ

ロジェクトをめぐる」

〈第二回研究会〉

二〇一六年七月二三日

ゴウランガ・チャラン・プラダン「外国における『方丈

記』の受容——夏目漱石の『英訳方丈記』をめぐる

——」

マラル・アンドソヴァ「カザフスタンにおける日本神話の

受容——現状と課題」

今後の予定 大衆文化キックオフシンポなど

山藤夏郎「へ古典性」再考——台湾の『國文』教育を参照

事例として——」

二〇一六年七月二四日

伊藤慎吾「ライトノベルと怪談資料」

(文責：研究協力課)

基礎領域研究

韓国語運用の応用 (継続)

代表者 松田利彦

概要 研究その他の業務で韓国語を必要とするものに対し、会話、読解、聴解の習得を目指した授業を行う。

古記録学基礎研究 (継続)

代表者 倉本一宏

概要 日本前近代の根幹的史料である古記録の解読を、原本や写本の見方・扱い方も含めて考えていく。大学院生・教職員・他大学の院生・研究者の参加も歓迎する。

フランス語基礎運用 (初級) (継続)

代表者 稲賀繁美

概要 初心者を対象として、初歩の運用能力を実践的に身に付ける。教科書としては当該年度のNHKラジオ講座教材の準備を参加者各自に願う。他の教材は現場で提供する。

フランス語読解補助・論文作成指南 (中級) (継続)

代表者 稲賀繁美

概要 中級以上の実務能力開発、論文作製の手ほどきをする。教材については、受講生との相談のうえで決定する。

中世文学講読 (継続)

代表者 荒木 浩

概要 中世文学の影印本の読解を軸に、古典テキストの研究方法を考察する。

文学・文化史理論入門（継続）

代表者 坪井秀人

概要 文学および文化史に関する基礎的な理論を学びながらテキストの読解・分析の実践的方法を修得する。

近現代史史料文献研究（新規）

代表者 瀧井一博

概要 日本近現代史の基礎史料と古典的および先端的な文献を講読し、社会科学的历史研究の方法と実践を討究する。

彙報

(平成二八年四月一日～九月三〇日)

人事異動

◎平成二八年四月一日 採用

准教授 磯田道史

助教 石川 肇

◎平成二八年四月一日 併任

副所長 稲賀繁美

研究調整主幹 劉 建輝

研究調整主幹 松田利彦

研究調整主幹 磯前順一

海外研究交流室長 坪井秀人

文化資料研究企画室長 マルクス・リュッ

ターマン

情報管理施設長 山田奨治

インスティテューショナル・リサーチ室長

山田奨治

◎平成二八年四月一日 任用更新

准教授 佐野真由子

助教 北浦寛之

◎平成二八年四月一日 契約更新

(特任研究員)

特任助教 石上阿希

特任助教 古川綾子

◎平成二八年四月一日 契約

(客員)

外国人研究員 官 文娜(香港中文大学アジ

ア太平洋研究所名誉研究員)

外国人研究員 マラル・アンダソヴァ(カザ

フ国立女子教育大学研究員)

◎平成二八年六月一日 契約

(客員)

外国人研究員 山崎佳代子(ベオグラード大

学教授)

外国人研究員 鄭 在貞(ソウル市立大学校

教授)

◎平成二八年七月一日 契約

(客員)

外国人研究員 バーバラ・ハートリー(タス

マニア大学校シニア講師)

外国人研究員 宋 浣範(高麗大学グローバ

ル日本研究院副院長)

◎平成二八年七月三十一日 契約満了

(客員)

外国人研究員 イーゴリ・ボトローエフ(ブリ

ヤート国立大学准教授)

◎平成二八年八月三十一日 契約満了

(客員)

外国人研究員 グエン・ヴー・クイン・

ニュー(在ホーチミン日本国総領事館広報

文化班アシスタント)

外国人研究員 李 応寿(世宗大学校教授)

外国人研究員 龔 頴(中国社会科学学院哲

学研究所研究員)

外国人研究員 ボナヴェントゥーラ・ルペル

ティ(ヴェネツィア カ・フォスカリ大学

教授)

外国人研究員 鄭 在貞(ソウル市立大学校

教授)

◎平成二八年九月一日 契約

(客員)

外国人研究員 李 済滄(南京師範大学副教

授)

外国人研究員 鄭 相哲(韓国外国語大学教

授)

外国人研究員 劉 雨珍(南開大学教授)

外国人研究員 ワダ・マルシア・ミツヨ

(カールトン大学教授)

◎平成二八年九月二五日 契約満了

(客員)

外国人研究員 マラル・アンダソヴァ(カザ

フ国立女子教育大学研究員)

日文研フォーラム

第二九九回「平成二八年四月一二日(火)」

発表者 ボナヴェントゥーラ・ルペルティ

(ヴェネツィア カ・フォスカリ大学教授

／日文研外国人研究員)

テーマ 人形浄瑠璃文楽——伝統演劇の魅力

と苦難

コメンテーター 後藤静夫(京都市立芸術大

学名誉教授)、細川周平教授

第三〇〇回「平成二八年五月一〇日(火)」

発表者 李 応寿(世宗大学校韓日芸能研究

所所長／日文研外国人研究員)

テーマ 獅子舞がたぐ東アジア

コメンテーター 稲賀繁美副所長、劉 建輝

教授

第三〇一回「平成二八年六月一四日(火)」

発表者 グエン・ヴー・クイン・ニユー(在

ホーチミン日本国総領事館広報文化班アシ

スタント／日文研外国人研究員)

テーマ「古くて新しいもの」——ベトナム

人の俳句観から日本文化の浸透を探索

コメンテーター 水城幾雄(元・在ホーチミ

ン日本領事／前・在パナマ特命全権日本大

使)、倉本一宏教授

第三〇二回「平成二八年七月一二日(火)」

発表者 龔 穎(中国社会科学院哲学研究

所研究員／日文研外国人研究員)

テーマ 中国近代心理学の先駆け、陳大斉の

日本留学とそれから——小秀才から教育者

へ

コメンテーター 伊東貴之教授

第三〇三回「平成二八年九月一三日(火)」

発表者 マラル・アンダソヴァ(カザフ国立

女子教育大学言語学部研究員／日文研外国

人研究員)

テーマ 変容するヤマト——『古事記』の「天

皇」を考える——

コメンテーター 金沢英之(北海道大学准教

授)

木曜セミナー

第二二六回「平成二八年四月二一日(木)」

話者 郭 南燕准教授

テーマ キリシタン文学の継承…宣教師の日

本語文学

コメンテーター 井上章一教授

第二二七回「平成二八年五月二六日(木)」

話者 稲賀繁美副所長

テーマ 稲賀繁美『接触造形論』(名古屋大

学出版会、二〇一六)をめぐる

書評者 細川周平教授、宮崎康子技術補佐員

第二二八回 [平成二八年六月二三日 (木)]

話者 坪井秀人教授と『日本研究』編集の仲間たち

テーマ 『日本研究』編集の現場から

第二二九回 [平成二八年七月二一日 (木)]

話者 待鳥聡史 (京都大学大学院法学研究科教授)

テーマ アメリカ大統領制の歴史・現在・未来―制度分析の観点から

コメンテーター 楠 綾子准教授

第二三〇回 [平成二八年九月二三日 (金)]

話者 磯田道史准教授

テーマ 藩政を比較する

Nichibunken Evening Seminar

第二〇六回 [平成二八年四月七日 (木)]

発表者 グエン・ヴー・クイン・ニュー (在ホーチミン日本国総領事館広報文化班アシスタント／日文研外国人研究員)

テーマ Enjoying Haiku as It Is: A Vietnamese

View

第二〇七回 [平成二八年五月一二日 (木)]

発表者 デビット・ジョンソン (ボストンカレッジ哲学部助教授)

テーマ The Relational Self: Nature and

Sociality in the Philosophy of Watsuji Tetsurō

第二〇八回 [平成二八年六月一日 (水)]

発表者 イヴォンヌ・タスカ (イースト・アングリア大学映画学教授兼人文学部長)

テーマ Celebrity Creativity: Picturing

Women Film Directors through Historical

Perspectives and Contemporary Themes

コメンテーター 北浦寛之助教

第二〇九回 [平成二八年七月七日 (木)]

発表者 クリストファー・レーリック (日文研外来研究員)

テーマ Reconsidering Mircea Eliade: Politics

of Religious Studies and the Morphology of

Religion

コメンテーター 磯前順一教授

第二一〇回 [平成二八年九月八日 (木)]

発表者 マティアス・ハイエク (パリ・ディ

ドロ大学東アジア言語文化学部日本学科准教授／日文研外国人研究員)

テーマ Looking for 'Correct' Knowledge in

Early Edo Japan: Baba Nobutake's Critic and

Defense of Various Theories (Shosetsu

bendan 諸説辨断, 1715) and Its Context

学術講演会

第六二回 [平成二八年六月二八日 (火)]

講演者 磯田道史准教授

テーマ 徳川時代から発想する―経済・教育・防災―

講演者 劉 建輝教授

テーマ 支え合う近代―文化史から見る日中二百年―

司会 榎本 渉准教授

第六三回 [平成二八年九月一四日 (水)]

講演者 榎本 渉准教授

テーマ 中世東シナ海の航路を守る神

講演者 倉本一宏教授

テーマ 戦争の日本史
司 会 細川周平教授

日文研・アイハウス連携フォーラム

第八回「平成二八年七月二七日（水）」

講演者 周 関（北京語言大学比較文学研

究所教授／日文研外国人研究員）

テーマ 川端康成文学と中国美術

会議

運営会議

第四一回 平成二八年 六月一七日（金）

第四二回 平成二八年 九月 九日（金）

調整会議

第二五三回 平成二八年 四月 六日（水）

第二五四回 平成二八年 四月二〇日（水）

第二五五回 平成二八年 五月十一日（水）

第二五六回 平成二八年 五月二五日（水）

第二五七回 平成二八年 六月 八日（水）

第二五八回 平成二八年 六月二二日（水）

第二五九回 平成二八年 七月 六日（水）

第二六〇回 平成二八年 七月二〇日（水）

第二六一回 平成二八年 九月 七日（水）

第二六二回 平成二八年 九月二一日（水）

センター会議

第二五三回 平成二八年 四月 七日（木）

第二五四回 平成二八年 四月二一日（木）

第二五五回 平成二八年 五月一二日（木）

第二五六回 平成二八年 五月二六日（木）

第二五七回 平成二八年 六月一〇日（金）

第二五八回 平成二八年 六月二三日（木）

第二五九回 平成二八年 七月 七日（木）

第二六〇回 平成二八年 七月二一日（木）

第二六一回 平成二八年 九月 八日（木）

第二六二回 平成二八年 九月二三日（金）

外国人来訪者

平成二八年五月二六日 Mark BLUM（カリ

フォルニア大学バークレー校教授）、

Gregory LEVINE（カリフォルニア大学バ

ークレー校准教授）他八名

平成二八年六月二七日 張海燕（台湾・中国

文化大学理事）、徐興慶（台湾・中国文化

大学校務発展諮詢委員）、方獻洲（台湾・

中国文化大学日文系主任）他三名

平成二八年七月六日 サランヤル・コンジッ

ト（チェンマイ大学人文学部日本研究セン

ター所長）、西田昌之（チェンマイ大学人

文学部日本研究センター副センター長）

海外渡航

坪井秀人 教授

目的 台湾大学にてシンポジウム参加、講

演

目的国 台湾

期間 平成二八年四月二九日～五月一日

倉本一宏 教授

目的 漢城、石村洞古墳群積石塚、乾芝山

城等にて現地調査及び史料収集

目的国 韓国

期間 平成二八年五月一九日～二三日

瀧井一博 教授

目的 香港市立大学にて視察及び講演

- 目的国 香港
 期間 平成二八年五月二八日～三一日
 坪井秀人 教授
 目的 カリフォルニア大学にてワークショップ参加及び報告
 目的国 アメリカ
 期間 平成二八年六月二日～六日
 劉建輝 教授
 目的 台湾大学にてワークショップ参加及び講演
 目的国 台湾
 期間 平成二八年六月一七日～二〇日
 伊東貴之 教授
 目的 中央研究院近代史研究所にて研究報告
 目的国 台湾
 期間 平成二八年六月二二日～二六日
 松田利彦 教授
 目的 翰林大学校にてシンポジウム参加及び報告
 目的国 韓国
 期間 平成二八年六月二九日～七月四日
 松田利彦 教授
 目的 Johns Hopkins University, Medical Archives 及び The Rockefeller Archive Center、ハーバード大学ヒューストン図書館、ジョン・F・ケネディ図書館にて資料調査
 目的国 アメリカ
 期間 平成二八年七月二三日～八月二日
 荒木浩 教授
 目的 チュラロンコーン大学にて客員教授として講座担当
 目的国 タイ
 期間 平成二八年八月七日～九月一八日
 石上阿希 特任助教
 目的 ロンドン大学 SOAS にて資料調査及び国際シンポジウム準備
 目的国 イギリス
 期間 平成二八年八月一五日～九月一六日
 坪井秀人 教授
 目的 高麗大学校にて講演
 目的国 韓国
 期間 平成二八年八月二四日～二八日
 楠綾子 准教授
 目的 Rockefeller Archive Center 及び世界貿易センタービル、エリス島移民博物館、国立公文書館、議会図書館にて資料調査、収集
 目的国 アメリカ
 期間 平成二八年八月二四日～九月三日
 劉建輝 教授
 目的 東北師範大学及び吉林省図書館、長春市図書館にて打合せ及び資料調査
 目的国 中国
 期間 平成二八年八月二七日～九月三日
 佐野真由子 准教授
 目的 Victoria and Albert Museum 及び Martyn Gregory Gallery、Royal Asiatic Society、City of Westminster Archives Centre にてプロジェクトに係わる調査、ロンドン大学 SOAS にて学会参加及び発表
 目的国 イギリス

期間	平成二八年九月三日～一二日	坪井秀人 教授	目的	ライプツィヒ大学東アジア研究所及びオーストリア国立図書館にて打合せ及びワークショップ参加、資料調査	目的国	ドイツ、オーストリア	期間	平成二八年九月四日～一一日	稲賀繁美 教授	目的	台北市立美術館にて講演	目的国	台湾	期間	平成二八年九月一〇日～一三日	山田奨治 教授	目的	カリフォルニア大学バークレイ校他
期間	平成二八年九月一五日～二二日	松田利彦 教授	目的	ヨイドレキシントンホテル及び国会図書館にて発表及び資料調査	目的国	韓国	期間	平成二八年九月二二日～二四日	劉建輝 教授	目的	東洋日報社にてフォーラム参加及び講演	目的国	韓国	期間	平成二八年九月三〇日～一〇月四日			
期間	平成二八年九月一〇日～一四日	大塚英志 教授	目的	ブカレスト大学にて総会出席	目的国	ルーマニア	期間	平成二八年九月一二日～一九日	郭南燕 准教授	目的	上海土山湾博物館及び徐光啓記念館、上海工芸美術博物館、上海博物館、上海余山天文博物館、余山天主堂、上海図書館、上海図書館徐家匯藏書楼にて資料調査	目的国	中国					
期間	平成二八年九月三日～一二日	坪井秀人 教授	目的	ライプツィヒ大学東アジア研究所及びオーストリア国立図書館にて打合せ及びワークショップ参加、資料調査	目的国	ドイツ、オーストリア	期間	平成二八年九月四日～一一日	稲賀繁美 教授	目的	台北市立美術館にて講演	目的国	台湾	期間	平成二八年九月一〇日～一三日	山田奨治 教授	目的	カリフォルニア大学バークレイ校他

所員活動一覽（二〇一六年四月一日～九月三〇日）

荒木 浩

●著書

『徒然草への途 中世びとの心とことば』勉誠出版 二〇一六年六月 四四〇頁

●論文

「平成二十七年例会シンポジウム「夢記研究の現在」——〈夢と表象〉研究と「夢記」の位置」『仏教文学』四一号 二〇一六年四月 四九～五四頁（査読付き）

「煙たい月と日本文化——その顔の形象をめぐる」Conference Proceedings Future Perspectives: 25 Years Japanese Studies at Sofia University “St Kliment Ohridski”, Boyka Tsigova, Gergana Petkova, Yara Nikolova 編, Sofia University Press, 二〇一六年四月 二七～三九頁（査読付き）

「『今昔物語集』の宋代序説」李銘敬・小峯和明編『アジア遊学一九七 日本文学のなかの〈中国〉』勉誠出版 二〇一六年六月 一六～三一頁（招待）

「禅の本としての『方丈記』——『流水抄』と漱石・子規往復書簡から見えること——」天野文雄監修『禅からみた日本中世の社会と文化』ぺりかん社 二〇一六年七月 二二～二二九頁

「『講演会』 二〇一五年六月大会「仏教説話の流れ」…対外観の中の仏教説話と説話集——「諸教要集」をめぐる——」『説話文学研究』第五一号 一一～二四頁 二〇一六年八月（査読付き）

●その他の執筆活動

「眠りと夢文化——その歴史性と近代化」睡眠文化研究会編『図録 ねむり展…眠れるものの文化誌』松香堂書店 二〇一六年四月 四四～四五頁

石上阿希

●論文

「山東京伝艶本・春画目録稿」『文学』一七巻四号 二〇一六年七月 一六九～一八一頁

●その他の執筆活動

「インタビュー 表現をめぐる冒険1」『神戸新聞』（夕刊）二〇一六年四月一六日

「対談 おんなのしんぶん 米團治の粹な嘶で行きましよう（桂米團治と）」『毎日新聞』（朝刊）二〇一六年五月九日

石川 肇

●論文

「国定教科書にみる移植民表象——北南米と満洲の連動に着目して」根川幸男・井上章一編『越境と連動の日系移民教育史——複数文化体験の

視座』ミネルヴァ書房 二〇一六年六月二〇日 九一～一〇八頁

●その他の執筆活動

「知を拓く——研究最前線27回 国際日本文化研究センター助教 石川 肇さん」『京都新聞』（朝刊）二〇一六年九月一五日

磯田道史

●その他の執筆活動

「『大特集』九州・熊本大地震 大地が割れた——歴史学者・磯田道史さんに聞く——17世紀と酷似 中四国も要警戒」『アエラ』二〇一六年五月二―九日合併号 二五～二七頁

「書評 石井妙子著『原節子の真実』」毎日新聞（朝刊）二〇一六年五月八日

「書評 海野洋著『食糧も大丈夫也』」毎日新聞（朝刊）二〇一六年七月一〇日

「書評 本村凌二著『競馬の世界史』」毎日新聞（朝刊）二〇一六年九月一日

「古今をちこち」(連載中) 読売新聞(朝刊) 二〇一六年四月一三日～九月一四日

磯前順一

●論文

「卑弥呼の鬼道 天皇祭祀との比較」白石太一郎他編『纏向発見と邪馬台国の全貌』角川文化振興財団 二〇一六年七月 二二八～二八一頁

●その他の執筆活動

「メディア時評」(連載 月一回掲載)『毎日新聞』(東京版・朝刊) 二〇一六年四～七月

「巡礼人生」(連載 月一回掲載)『朝日新聞』(茨城版・朝刊) 二〇一六年四～九月

伊東貴之

●著書

『明末清初學術思想史再探國際學術研討會 Revisiting Intellectual History of the Ming-Qing Transition 會議論文集』(共著) 台湾・中央研究院近代史研究所＋中央研究院歷史語言研究所 二〇一六年六月

●論文

「清代考據學再考―以清代《尚書》學為例―」『明末清初學術思想史再探國際學術研討會 Revisiting Intellectual History of the Ming-Qing Transition 會議論文集』台湾・中央研究院近代史研究所＋中央研究院歷史語言研究所 二〇一六年六月 一～一二頁

稲賀繁美

●論文

「見知らぬ島へ…竹久夢二の夢とあこがれ——竹久夢二学会の旗揚げに寄せて」『あいだ』二二五号(連載一一四) 二〇一六年四月二〇日 一〇～一七頁

「幽霊の蘇生…お化けをいかにしてよみがえらせられるか?」——全球的な知覚から近代性を問い直す…モダニティを振り返って再定義し、デジタル化されたグローバル尺度モデルを修正する (前)『あいだ』二二六号 (連載一一五) 二〇一六年五月二〇日 一八〇二七頁、(後)『あいだ』二二七号 (連載一一六) 二〇一六年七月二〇日 一四〇二二頁

「ジャポニスム——その領域と研究史」山根郁信編『別冊太陽——ガレとラリックのジャポニスム』平凡社 二〇一六年七月一〇日 五〇九頁
「美術史は全球化しうるか?」東浩紀編『ゲンロン3——脱戦後日本美術』株式会社ゲンロン 二〇一六年七月一五日 一六九〇一八六頁
「去勢・不能から瞬時性と輪廻転生、さらには可能世界の濃度計測へ (前)『あいだ』二二八号 (連載一一七) 二〇一六年八月二〇日 二二〇二六頁

●その他の執筆活動

「書評 山下善明著『美とうつくしき——へあるがまま』についての思索」『図書新聞』三二四九号 二〇一六年四月二日

「私」と「わたし」が出会うとき——あるいは双子の幽霊…輪廻転生説と複数字宙論から『国立国際美術館ニュース』二一四号 国立国際美術館 二〇一六年六月一日 二〇三頁

「国際秩序の基本法の設定をめぐる東西理論闘争の幕開け?」——「中国伝統の国際関係における〈五倫国際関係論〉という規範理論構築」をめぐって『図書新聞』三二五九号 (連載一六四) 二〇一六年六月一八日

「円卓会議 Part 1, Part 2」『第49回 SGR A フォーラム 日本研究の新しいパラダイムを求めて』SGRA レポート No. 0074 二〇一六年六月二〇日 五七〇五八、七五〇七六頁

「現代のことば 数値にならない価値の復権」『京都新聞』(夕刊) 二〇一六年七月六日

「The Way is in the Passage rather than the Path——『茶の本』はいかにポール・ケイラス訳『道德経』の「道」を読み替えたか」『図書新聞』三二六二号 (連載一六五) 二〇一六年七月九日

「会議での発言」『MAM Documents 002 日本およびアジア地域におけるグローバル・アートとディアスポラ・アート (森美術館、ニューヨーク大学グローバル・アート・エクスチェンジ、東京大学 IHS プログラム共催シンポジウム記録集)』森美術館 二〇一六年七月三〇日 一八一〇一八六、二八九〇二九一頁 (招待)

「声はどこから到来し、どこに宿り、どこへと舞い発つのか——疑似餌としての標準語・霊媒としての詩語」『図書新聞』三二六六号（連載一六六）二〇一六年八月六日

「書評 林進著『宗達絵画の解釈学——『風神雷神図屏風』の雷神はなぜ白いのか』」『図書新聞』三二六七号 二〇一六年八月一三日

「現代のことば コケモモの実が坂道に」『京都新聞』（夕刊）二〇一六年八月二三日

「力を抜くこと 一教の稽古のための初歩的な覚え書き」『かみはま合気道』二〇一六年度版 第一八号 三重大学合気道部OB会 二〇一六年八月 四〜七頁

「ゴーギャンとルドンとラファディオ・ハーンを繋ぐ見えない糸——ダリオ・ガンボーニ来日記念講演会＋シンポジウムでの雑感」『図書新聞』三二七二号 二〇一六年九月二四日

井上章一

●著書

『関西人の正体』（文庫）朝日新聞出版 二〇一六年七月三〇日 二六三頁

●その他の執筆活動

「高山右近」『文藝春秋SPECIAL』二〇一六年四月一日

「光の国からきた男」『かまくら春秋』二〇一六年四月一日

「書評 ファブリツィオ・グラッセリ著『イタリア人が見た日本の「家と街」の不思議』」『週刊ポスト』二〇一六年四月八日号

「再録 日常の襷を読み解く 多田道太郎さんを悼む」共同通信文化部編『追悼文大全』三省堂 二〇一六年四月八日

「老いのくりごと」甲斐扶佐義編『追憶のほんやら洞』風媒社 二〇一六年四月一九日

「書評 安松みゆき著『ナチス・ドイツとへ帝国』日本美術』『日本経済新聞』（夕刊）二〇一六年四月二一日

「シリーズ刊行告知 日本文化をとらえなおす」『日記で読む日本史』臨川書店 二〇一六年四月

「京都を知る」『朝日新聞』（朝刊）二〇一六年五月八日

- 「和風の屋根が冠されたビルを、どう見るか」『別冊「環」・ウッドファースト!』二〇一六年五月一〇日
- 「書評 ロバート・ロス著『洋服を着る近代』」『日本経済新聞』（夕刊）二〇一六年五月一九日
- 「ぜいたく仕様を各国首脳に」『京都新聞』（朝刊）二〇一六年五月二七日
- 「書評 長山靖生著『奇異譚とユートピア』」『週刊ポスト』二〇一六年五月二七日号
- 「講演録 日本古代の古代性へシンポジウム」——『日本に古代はあったのか』をめぐって』加藤謙吉他編『日本古代の地域と交流』臨川書店
二〇一六年五月三一日
- 「講演録 風俗史から見た現代日本のキリスト教」『国際基督教大学学報3—A アジア文化研究別冊』二〇一六年五月三一日
- 「書評 竹中亨著『明治のワグナー・ブーム』」『日本経済新聞』（夕刊）二〇一六年六月九日
- 「京都と文化庁」『中日新聞』二〇一六年六月一七日
- 「あとがき——身体と建築」根川幸男共編『越境と連動の日系移民史——複数文化体験の視座』ミネルヴァ書房 二〇一六年六月二〇日
- 「書評 西川照子著『金太郎の母を探ねて』」『日本経済新聞』（夕刊）二〇一六年六月三〇日
- 「堕ちる時」NICHIBUNKEN NEWSLETTER No. 93 二〇一六年六月
- 「対談 京都ざらい?の関西案内（井上理津子と）」『みんなのミシマガジン』二〇一六年六月三〇日
- 「鼎談書評（山内昌之、片山杜秀と）」『文藝春秋』二〇一六年七月号
- 「谷崎潤一郎と岩野泡鳴——それぞれの大阪女性像——」『群像』二〇一六年七月号
- 「対談 司馬遼太郎」『講演要旨 司馬さん、関東史観せつないです』『産経新聞』（朝刊）二〇一六年七月一三日
- 「書評 林真理子・内田樹共著『才色兼備』が育つ神戸女学院の教え」『週刊ポスト』二〇一六年七月一五号
- 「講演録 戦争と近代を都市に読む——ピアノの音色とともに」『遼』六〇号 二〇一六年七月二〇日
- 「書評 高谷知佳著『怪異』の政治社会学」『日本経済新聞』（夕刊）二〇一六年七月二一日
- 「京都の歩き方」『日経おとなのOFF』二〇一六年八月号
- 「いまこそ読みたい『いの二冊』『サライ』」二〇一六年八月号

「書評 玉木俊明著『歴史の見方』『日本経済新聞』（夕刊） 二〇一六年八月一八日
「京都弁の女たち」『PHP』二〇一六年九月増刊号

「書評 額原澄子著『原爆ドーム』『日本経済新聞』（夕刊） 二〇一六年九月八日
「大阪まみれ」（連載二四回）『産経新聞』（夕刊） 二〇一六年四月四日～九月二六日
「書評 山際康之著『兵隊になった沢村栄治』『週刊ポスト』二〇一六年九月三〇日号

牛村 圭

●論文

「歴史に向きあい、語り合うために——歴史修正主義を考える」『琅』三〇号 二〇一六年四月 一～一四頁
「近代オリソニック一二〇年」『学際』第二号 二〇一六年九月 一四～二四頁

榎本 渉

●その他の執筆活動

「書評 手島崇裕著『平安時代の対外関係と仏教』『ヒストリア』二五六号 二〇一六年六月 六〇～六九頁
「新刊の情報と紹介 桑野栄治著『李成桂―天翔る海東の龍（世界史リブレット人37）』『歴史と地理』六九七号 二〇一六年九月 四七～五〇頁

大塚英志

●著書

『二階の住人とその時代 転形期のサブカルチャー私史』講談社 二〇一六年四月 四九三頁
『TOBIO Critiques #2』（編著）太田出版 二〇一六年五月 一九六頁

●その他の執筆活動

- 「クウデタア2」(西川聖蘭と共著)『ComicWalker・大塚英志漫画』二〇一六年四〜七月
- 「恋する民俗学者」(中島千晴と共著)『ComicWalker』二〇一六年四〜九月
- 「現代のことば」『京都新聞』(夕刊) 二〇一六年四月一日
- 「現代のことば」『京都新聞』(夕刊) 二〇一六年五月三十一日
- 「まんがでわかる まんがの歴史」(ひらりと共著)『ヤングエース』二〇一六年五月号〜九月号
- 「書評 井出幸男著『宮本常一と土佐源氏の真実』『週刊ポスト』二〇一六年五月二十七日号
- 「【第6回】角川歴彦とメディアミックスの時代」『最前線』二〇一六年五月三〇日
- 「【第7回】角川歴彦とメディアミックスの時代」『最前線』二〇一六年六月八日
- 「妖怪学批判」『怪』Vol.0048 二〇一六年七月 二七〇〜二八三頁
- 「レイヤーの美学」『EYESCREAM2016年10月号増刊「新海誠、その作品と人。」』二〇一六年八月 二八〜二九頁
- 「物語労働論 web上の「新しい労働問題」をめぐって」『早稲田文学』2016年秋号 二〇一六年九月 一九〜二九頁
- 「クウデタア2」(西川聖蘭と共著)『早稲田文学』2016年秋号 二〇一六年九月 一一七〜一六五頁
- 「『クウデタア2』について」『早稲田文学』2016年秋号 二〇一六年九月 一六六〜一七〇頁
- 「書評 草森紳一著『絶対の宣伝 ナチス・プロパガンダ3 煽動の方法』『週刊ポスト』二〇一六年九月三〇日号

郭 南燕

●著書

- 『世界の日本研究2015:「日本研究」を通じて人文科学を考える』(白石恵と共編) 国際日本文化研究センター 二〇一六年五月 二四八頁

北浦寛之

●著書

『戦後映画の産業空間―資本・娯楽・興行』（谷川建司他と共著）森話社 二〇一六年七月 三五二頁

●その他の執筆活動

「ハンセン病経験者の映画体験―映画を観ることと正すこと」『日本映画学会第5回例会プロシーディングス』二〇一六年九月

楠 綾子

●論文

“Consensus Building on Use of Military Bases in Mainland Japan: US-Japan Relations in the 1950s,” *The Japanese Journal of American Studies*, No. 27 (2016), pp. 145–165. (査読付き)

「大西洋憲章からポツダム宣言まで」筒井清忠編『昭和史講義2―専門研究者が見る戦争への道』ちくま新書 二〇一六年七月 二八七―三〇四頁

「芦田均―対米協調論者の「国際貢献」論」増田弘編著『戦後日本首相の外交思想―吉田茂から小泉純一郎まで』ミネルヴァ書房 二〇一六年九月 五一―七八頁

倉本一宏

●著書

『日記で読む日本史11 平安時代の国司の赴任』（監修、森公章著）臨川書店 二〇一六年四月 二一六頁

『日記で読む日本史19 「日記」と「随筆」』（監修、鈴木貞美著）臨川書店 二〇一六年四月 二九六頁

『現代語訳 小右記2 道長政権の成立』吉川弘文館 二〇一六年五月 三四八頁

『日本古代の地域と交流』（編、共著）臨川書店 二〇一六年五月 二八八頁

『日記で読む日本史1 日本人にとって日記とは何か』(編著) 臨川書店 二〇一六年七月 二七六頁

●論文

「日記が語る古代史」 倉本一宏編『日記で読む日本史1 日本人にとって日記とは何か』臨川書店 二〇一六年七月 一一〜四三頁

●その他の執筆活動

「監修者のことば」『日記で読む日本史』臨川書店 二〇一六年四月

「つれづれ彩時記1 蘇我氏について」『朝日新聞』(夕刊) 二〇一六年四月

「はじめに」『日本古代の地域と交流』臨川書店 二〇一六年五月 五〜九頁

「『おわりに』に代えて——日文研と歴史学会」『日本古代の地域と交流』臨川書店 二〇一六年五月 二七九〜二八三頁

「つれづれ彩時記2 古記録と平安貴族社会」『朝日新聞』(夕刊) 二〇一六年五月

「つれづれ彩時記3 前近代日本史と戦争」『朝日新聞』(夕刊) 二〇一六年六月

「新刊の情報と紹介 丸山裕美子著『清少納言と紫式部』」『歴史と地理 日本史の研究』二五三 二〇一六年六月 四三〜四六頁

フレデリック・クレインス

●論文

「徳川家康の外交——外国の史料に見る家康像」笠谷和比古編『徳川家康 その政治と文化・芸能』宮帯出版 二〇一六年六月 一三二〜一四七頁

小松和彦

●著書

『別冊宝島二四六三号 京都魔界図絵』(監修) 宝島社 二〇一六年五月 一一頁

『青森ねぶた誌 増補版』(宮田登と共同監修) 青森市 二〇一六年八月一日 四三六頁

●その他の執筆活動

- 「言葉の遠近法」(連載六回)『公明新聞』二〇一六年四月二〇日～九月七日
 「怨霊都市・京都の鬼と天狗」『別冊宝島二四六三号 京都魔界図絵』二〇一六年五月
 「わたしは福の神?」『桑籬』一八号 二〇一六年六月
 「編集委員インタビュー 大学に「文系」は必要ですか?」『神戸新聞』(朝刊) 二〇一六年六月五日
 「アニメズムと絵解きが妖怪文化を生み出した」『水の文化』五三号 二〇一六年六月
 「対談 妖怪たちのいるところ―水木しげる以降の文化のゆくえ(京極夏彦と)」『ユリイカ』七月号 二〇一六年七月
 「妖怪は、います 妖怪と日本人の心」『母の友』八月号 二〇一六年八月

佐野真由子

●著書

『幕末外交儀礼の研究——欧米外交官たちの將軍拝謁』思文閣出版 二〇一六年七月

●論文

「幕末の遣外使節日記——淵辺徳蔵『欧行日記』、柴田剛中『仏英行』に見る日本人の「開国」」倉本一宏編『日記で読む日本史1 日本人にとって日記とは何か』臨川書店 二〇一六年七月 九七～一二七頁

●その他の執筆活動

“Diplomatic Ceremonial in the last decade of Tokugawa shogunate (1857–1867): Japan’s first step into the international society,” *Joint East Asian Studies Conference 2016 - Book of Abstracts*, London: SOAS, University of London, September 2016, p. 96.

瀧井一博

●著書

『渡邊洪基』 ミネルヴァ書房 二〇一六年八月 三七六頁

(共編) *Staatsverständnis in Japan: Ideen und Wirklichkeiten des japanischen Staates in der Moderne*, Michael Wachtutka/Kazuhiro Takii (Hrsg.), Nomos, August 2016, 204 pages.

● 論文

「日本憲法史における伊藤博文の遺産」駒村圭吾・待鳥聡史編『「憲法改正」の比較政治学』弘文堂 二〇一六年六月 四〇九～四四〇頁

● その他の執筆活動

「政治学の古典を読む (一五) 覇道としての文明 (イエーリング著、村上淳一訳『権利のための闘争』岩波文庫 一九八二年)」「『究』第六二号 ミネルヴァ書房 二〇一六年五月号 四四～四五頁

「シーボルト賞授賞式に参列して」*NICHIBUNKEN NEWSLETTER* No. 93 二〇一六年六月 一～三頁

「政治学の古典を読む (一六) 「国家学者」吉野作造 (吉野作造著、岡義武編『吉野作造評論集』岩波文庫 一九七五年)」「『究』第六五号 ミネルヴァ書房 二〇一六年八月号 四四～四五頁

「明治憲法の流れくむ現行憲法」『週刊エコノミスト』毎日新聞社 二〇一六年八月三〇日号 八四～八五頁

坪井秀人

● 論文

「柵の中で——日系人強制収容所の中の書記空間」『Juncture』第七号 名古屋大学「アジアの中の日本文化」研究センター 二〇一六年四月 七六～八六頁

「二十世紀日本語詩を思い出す」『現代詩手帖』思潮社 (連載中) 第五九卷四号 (連載第一二) 二〇一六年四月 一三二～一三八頁、第五九卷五号 (連載第一三) 二〇一六年五月 一四八～一五六頁、第五九卷六号 (連載第一四) 二〇一六年六月 一五〇～一五七頁、第五九卷七号 (連載第一五) 二〇一六年七月 一八二～一八九頁、第五九卷八号 (連載第一六) 二〇一六年八月 一九四～二〇三頁、第五九卷九号 (連載第一七) 二〇一六年九月 一五〇～一五七頁

「子午線 死者論言説と戦後八十年」『日本文学』日本文学協会 第六五巻第八号 二〇一六年八月 七四～七六頁

「戦後空間を生きるのびる〈変態〉——阿部定と熊沢天皇」竹内瑞穂＋「メタモ研究会」編『〈変態〉二十面相 もうひとつの近代日本精神史』六花出版 二〇一六年九月 一七一～一八五頁

●その他の執筆活動

「あとがきに代えて メタモ（変態）とは何ぞや」竹内瑞穂＋「メタモ研究会」編『〈変態〉二十面相 もうひとつの近代日本精神史』六花出版 二〇一六年九月 一九〇～一九二頁

パトリシア・フィスター

●論文

“Creating Art in Japan’s Imperial Buddhist Convents: Devotional Practice and Cultural Pastime,” *Women, Gender and Art in Asia, c. 1500–1900*, London: Routledge, July 2016, pp. 147–171.

ジョン・グリーン

●著書

『変容する聖地 伊勢』（編著）思文閣出版 二〇一六年六月 三四〇頁

●論文

“Amaterasu’s progress: the Ise shrines and the public sphere of postwar Japan,” *Japan Society Proceedings No. 152*, 2016, pp. 40–58.

「天皇の外交と国際認識——1868～94年」小風秀雅編『大学の日本史——教養から考える歴史へ 4. 近代』山川出版社 二〇一六年四月 四八～五八頁

「戦後の伊勢ープリント・メディアにみる神宮と式年遷宮ー」『変容する聖地 伊勢』思文閣出版 二〇一六年六月 二七六～二九五頁

●その他の執筆活動

「序章 伊勢神宮―変容の歴史―」「あとがき」『変容する聖地 伊勢』思文閣出版 二〇一六年六月 三〇一五頁、三一八〇三二頁
「対談 伊勢神宮と国家儀礼―その歴史と政治をめぐって（島蘭進と）」「世界」八八三号 二〇一六年六月 一九七〇二〇六頁
「世界の中の神道研究」『鴨東通信』一〇二号 二〇一六年七月 一二〇一三頁
「知らなかった聖地のルーツ」『一個人』七月号 二〇一六年七月 四六〇四九頁
[Japan Review 三〇号をむかえて（その二）]『日文研』五七号 二〇一六年九月 五八〇六〇頁

古川綾子

●その他の執筆活動

「現代の言葉 まあぼちぼちに」『京都新聞』（夕刊） 二〇一六年七月一五日

細川周平

●論文

「戦前日本の探弑文化―異国情趣与中国趣味」『日語学習与研究 *Journal of Japanese Language Study and Research*』中国日語教学研究会会刊、
中国外語類核心期刊 二〇一六年三月号 七〇一三頁

「文化使節と同胞慰問―ブラジルの藤原義江一人二役」根川幸男・井上章一編『越境と連動の日系移民教育史―複数文化体験の視座』ミネ
ルヴァ書房 二〇一六年六月 一七一〇一八八頁

●その他の執筆活動

「最先端の現場 総研大発3」『神奈川新聞』 二〇一六年七月八日

「この三冊 ブラジル」『毎日新聞』（朝刊） 二〇一六年七月二四日

松田利彦

●論文

「“히타치취업차별사건” 이후 제일 한국인의 권리쟁취운동」『日立就職差別事件』以後の在日韓国人の権利獲得運動」『청암대학교 재일코리안 연구소編』『재일코리안운동과 저항적 정체성』在日コリアン運動と抵抗的アイデンティティ』図書出版ソニン 二〇一六年七月 三八三～四〇一頁

●その他の執筆活動

「書評 辛珠柏編『韓国近現代人文学の制度化…一九一〇～一九五九年』(신주백 편『한국 근현대 인문학의 제도화 : 1910～1959』해안, 二〇一四年)」『日本研究』第五三集 二〇一六年六月 二八九～二九三頁

山田奨治

●著書

『日本の著作権はなぜもっと厳しくなるのか』人文書院 二〇一六年四月 二〇二頁

『大衆文化とナショナリズム』(朴順愛・谷川建司と共編) 森話社 二〇一六年五月 三三九頁

●論文

「特別リポート 21世紀の文化と著作権」『ブリタニカ国際年鑑2016』ブリタニカ・ジャパン株式会社 二〇一六年四月 一三二～一三三頁

「まえがき——大衆文化とナショナリズムの深い関係」朴順愛他編『大衆文化とナショナリズム』森話社 二〇一六年五月 七～一一頁

「メディア・コンテンツと著作権」岡本健・遠藤英樹編『メディア・コンテンツ論』ナカニシヤ出版 二〇一六年六月 三五～六三頁

「〈海賊版〉の可能性——オープンアクセスの創造力」佐藤卓己編『岩波講座 現代 第9巻 デジタル情報社会の未来』岩波書店 二〇一六年六月 一三一～一五二頁

●その他の執筆活動

「誰のため？ 何のため？ 著作権法改正へ 1 どう決める文化の法」『京都新聞』(朝刊) 二〇一六年四月四日

- 「誰のため? 何のため? 著作権法改正へ」 2 保護期間延長の得失」『京都新聞』(朝刊) 二〇一六年四月一八日
- 「誰のため? 何のため? 著作権法改正へ」 3 どこまで延長するか」『京都新聞』(朝刊) 二〇一六年四月二五日
- 「誰のため? 何のため? 著作権法改正へ」 4 戦時加算とは何か」『京都新聞』(朝刊) 二〇一六年五月二日
- 「誰のため? 何のため? 著作権法改正へ」 5 米国からの干渉」『京都新聞』(朝刊) 二〇一六年五月九日
- 「誰のため? 何のため? 著作権法改正へ」 6 民法の原則は守れるか」『京都新聞』(朝刊) 二〇一六年五月一六日
- 「誰のため? 何のため? 著作権法改正へ」 7 韓国の合意金ビジネス」『京都新聞』(朝刊) 二〇一六年五月二三日
- 「誰のため? 何のため? 著作権法改正へ」 8 透明性の効用」『京都新聞』(朝刊) 二〇一六年五月三〇日
- 「誰のため? 何のため? 著作権法改正へ」 9 違法ダウンロードが拡大?」『京都新聞』(朝刊) 二〇一六年六月六日
- 「誰のため? 何のため? 著作権法改正へ」 10 知られざるACTA」『京都新聞』(朝刊) 二〇一六年六月二〇日
- 「誰のため? 何のため? 著作権法改正へ」 11 旧エンブレムはパクリ?」『京都新聞』(朝刊) 二〇一六年六月二七日
- 「誰のため? 何のため? 著作権法改正へ」 12 AIは著作権を変える」『京都新聞』(朝刊) 二〇一六年七月四日
- 「書評 ニッシン・K・オトマツギン著『リージョン化された文化——アジアにおける日本発ポピュラー・カルチャーの政治経済学』」『日本研究』第五三集 二〇一六年六月 二八三〜二八五頁
- 「『東京ブギウギ』作詞は大拙の息子」『北國文華』第六九号 二〇一六年九月 五九〜七〇頁
- 「コメント サザエさんをさがして 敗戦からの「復興ソング」」『朝日新聞be』二〇一六年九月一〇日

劉 建輝

● 論文

「戦前期対中留学生支援事業の一考察——日華学会主事高橋君平の活動を中心に」東アジア比較文化国際会議日本支部編『東アジア比較文化研究』一五号 二〇一六年六月 二九〜三七頁

日文研 五十八号

二〇一七（平成二九）年三月三十一日発行

編集 細川周平、石川 肇、矢田部恵子

発行 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国際日本文化研究センター

住所 〒 610-1192 京都市西京区御陵大枝山町三丁目二番地

電話 (〇七五) 三三五—二二二二

ホームページ <http://www.nichibun.ac.jp>

印刷 中西印刷株式会社



NICHIBUNKEN

ISSN 0915-0889